

## 日本におけるアラビア語教科書と文法用語 ——教育戦略と基本用語の邦訳をめぐって——

小杉 泰\*・岡本 多平\*\*・竹田 敏之\*\*\*

### はじめに

本論の大きな目的は、日本におけるアラビア語教育で使用されている教科書でどのような文法用語が用いられているかの実態を調査し、その背景にある文法に対する考え方と想定される学習者に対する教育戦略の問題を考察し、さらに、最近のグローバル化とアラブ世界との交流の深化という現状をも踏まえた上で、どのような文法用語が適切であるかをめぐる問題提起をおこなうことである。

そのために、具体的な3つの作業をおこなう。第一に、1970年代から現在までに日本語で執筆、刊行されてきた主要なアラビア語教科書の文法用語をリスト化し、一覧・比較できるようにする。この作業の成果は、文法用語一覧表である「アラビア語主要テキスト文法用語対照表」として本論の末尾に附した。なお、1970年代以降を扱ったのは、この頃から日本語で本格的な文法入門書が書かれるようになったからである。このような網羅的なリストが作成されるのは、初めてのことである<sup>1)</sup>。

第二に、それらの文法用語の背景にある文法に対する考え方を、アラビア語文法史および想定される学習者に対する教育戦略という観点から、比較し、検討を加える。その際に、対比の観点から、英語圏で用いられている文法書も参照する。

第三に、いくつかの基本的な文法用語を取り出して、どのような邦訳を用いるべきかについて、何を基準に適切と判断すべきなのかという点について、最近のグローバル化や世界的なアラビア語教育の発展にもなあって、学習環境や学習者に質的・量的変化が生じていることを考慮しながら、いくつかの問題提起をおこなう。

なお、日本におけるアラビア語教育は、大半がフスハー(正則語)を中心としている。アーンミーヤ(地域毎に異なるいわゆる口語<sup>2)</sup>)を対象とする講座、授業も存在し、それに対応した教科書も一部出版されている<sup>3)</sup>。しかし、教科書のほとんどがフスハー対応である。本論は、文語・口語として用いられている現代のフスハーの文法およびその用語を対象とする<sup>4)</sup>。

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授、同研究科附属イスラーム地域研究センターセンター長

\*\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属イスラーム地域研究センター教務補佐員

\*\*\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 教科書によって用いられている文法の概念が異なっているため、それを一括して表にすることにはおのずと限界がある。表を一見した場合に、どのような基準に従ってそれぞれの用語をまとめたか判然としなないかもしれない。それぞれの用語について近似的に概括しており、表自体が特定の文法体系に立脚しているわけではないからである。しかし、表を作る目的は、それによって全体を眺望できるようにすることであり、これによって文法用語の検討が容易なものとなることが期待される。

2) 本論はアーンミーヤを対象とするものではないので、その定義には立ち入らない。

3) たとえば、[岡野利雄 1978; 西尾哲夫, 師岡カリマ・エルサムニー 1997; 石原忠佳 2000; 中江加津彦 2003] など。

4) フスハーはしばしば「文語」とされる。確かに、古典を読む場合、発話行為が記録されたものがほとんどなく、フスハーを文語とみなすことに特に問題はない。しかし、実際には、フスハーは教育を受けたアラブ人の共通語として古くから会話にも用いられており、また、現代でも小説などでは、会話文もフスハーで表記されることが多い。近年のメディアの発達によって、アラブ世界共通のフスハー(しばしば「メディア・アラビア語」と呼ばれる)が形成されつつあり、フスハーを口語としても用いる傾向は強まっている。したがって、フスハーとは「規範的な文法に依拠して用いられる(=正則語の)文語および口語」と理解することが妥当であろう。本論で対象

## 1. 日本語における文法用語の現状

末尾に掲載されている文法用語一覧を見ると、いくつかのことが判明する。これだけの一覧表を作成することが可能なところまで、多様な教科書が刊行され、それらを作成するために著者たちが真摯な努力を続けてきたことは、あえて言うまでもないであろう。日本におけるアラビア語教育の発展は、これらの教科書の存在そのものがよく示している。目を転じて問題点を考えるならば、まず、この一覧表では、アラビア語の文法用語のすべてが網羅されているわけではないことが指摘できる。その最大の理由は、ここで取り上げられているアラビア語教科書の大半が、文法の入門書であり、中級・上級の教科書が少ないこと、本格的な文法書が書かれていないことによる。そのため、記述され、説明されている文法事項が初学者から中級者向けの範囲にとどまっている。

ここでまず、日本におけるアラビア語教育と教科書の歴史的経緯を振り返っておくことにしよう。大学レベルでのアラビア語教育は、アラビア語学科が大阪外国語大学に設立されたのが1949年(当初は隔年の学生募集)<sup>5)</sup>、東京外国語大学に設立されたのが1961年(設立当初は「アラビア科」)であった。戦後になってアラビア語教育が本格化したことがわかる。他の大学でのアラビア語講座も1950年代以降に始められた。当初は、いずれでも独自の教科書はなく、欧米の教科書を用いて授業をおこなっていたと思われる。日本で刊行された最初期のものとして井筒俊彦著の教科書[井筒 1950]、大阪外国語大学で田中四郎が作成した[田中 1963]がある。後の1970年代に大阪外国語大学で池田修が作成した『アラビア語入門』[池田 n.d.]なども、教育の現場で用いられていた教授書としては比較的草創期に属するであろう。アラビア語で書かれていたが、初級の教科書である[エルサムニー 1966;1974]も日本で制作され、日本で使用された教科書に含まれる(エルサムニーが教鞭を取った東京外国語大学およびアジア・アフリカ語学院で使用)。ただし、「読本」と銘打っている通り、初学者をアラビア語の文に慣れさせることが目的とされており、文法説明は書かれていない。

先駆的な教科書として、川崎寅雄の入門書[川崎 1974a]があるが、1976年に刊行された『アラビア語入門』[飯森・黒柳 1976]は、一般に入手しうる形で公刊され、大学生を中心に広く用いられてきたという点で、日本で普及した最初のアラビア語教科書と言える。表紙が赤色であったため、学習者から「赤本」と呼ばれて親しまれてきた本書は、エジプトのアズハル大学アラビア語学部を卒業して帰国した飯森嘉助が、ペルシア語教育の大家である黒柳恒男との共著として刊行した入門書であった。これが長く愛用されてきたことは、出版元が廃業したあとも、他の出版社によってそのままの形で再刊されていることからわかる[飯森・黒柳 1999]。

飯森は、同じ頃、『実用アラビア語会話単語集——日・英・アラビア語』[飯森 1974]を刊行している。これは、本格的なアラビア語の語彙集として最初のものと言えるであろう<sup>6)</sup>。当時は、アラビア語の活字が日本になく、印刷をおこなったウラオカプリンティングが現地で購入した活字を手荷物として運んできた逸話などが伝わっている。アラビア語は右から左へ書くアルファベットを使ってお

とするフスハーは、現代におけるそのような正則語を指す。古典的なフスハーと現代標準アラビア語を区別する場合もあるが、古典的なアラビア語文献も現代の文章の中で日常的に——特にイスラーム関係の文献では——引用されている上、本論で対象とする教科書でもしばしば両者がフスハーとして一括されているので、ここではその区分にはこだわらない。

5) 1925年にヒンドウー語学科、マレー語学科の選択科目としてアラビア語の授業が設けられたが、学科としては、1940年、大阪外国語学校(当時)に亜刺比亜語部として設置されたのが最初である。大阪外国語学校は、1944年に大阪外事専門学校と改称、亜刺比亜語部はアラビア語科となり、1949年には大阪外国語大学と改称された。

6) 初学者向けの語彙集としては、[矢島 1966]があった。

り、日本語と合わせて活字を組む場合には大きな問題を解決しなければならない<sup>7)</sup>。そのため、「赤本」では、アラビア文字の部分は、アラビア語タイプライターで印字したものを貼り込んで用いていた。それと比して、日本語とアラビア語の活版活字を用いて印刷されたこの語彙集は歴史的な意義を有している。

時系列的に見れば、次いで、池田修『アラビア語入門』[池田 1976] が岩波書店から刊行された。アラビア語文法学者として著者がその識見を盛り込もうとした熱意が表れているが、例文として古典からの引用が多すぎて、一般読者にとってはやや難解な入門書との印象が否めない。

1973年の第4次中東戦争およびそれと連動する第1次石油ショックは、日本経済にとってのアラブ世界の重要性、ひいてはアラビア語学習の必要性を認識させた。上述の[飯森・黒柳 1976] [池田 1976]などは、その時代の要請に応じるものでもあった。続いて、1980年代には、大阪外国語大学を卒業し、東京外国語大学で教鞭をとっていた内記良一の『基礎アラビヤ語』[内記 1983]なども登場した。

なお、本論での対象外であるが、カルチャー・センターなどで教養としてのアラビア語学習者も増え始めた。そのようなニーズに対応した独習する初学者向けの教科書([奴田原・岡 1989])や、シリーズ化した懇切丁寧な教科書も作られた([本田 1981-1985])。

語学学習には、教科書だけではなく辞書が欠かせないことは言うまでもない。アラビア語・日本語の辞書として最初期に属するのは、川崎寅雄[川崎 1974b]であろう。この辞典は、アラビア文字のみならず日本語も右から左に配列されていた点で、きわめてユニークなものであった。副題として、アラビア語で「近代アラビア語の語彙」とされていた。次に出されたのが、[内記 1980] [池田・竹田 1981]であった。後者は、小辞典ながら、ようやく実用の域に達したものとして比較的広く使われた。また、バイルートで出版されたアラビア語・英語辞書(*al-Farā'id al-Durrīya*)の翻訳が、外交畑でアラブ諸国との友好に尽くした田村秀治<sup>8)</sup>を編集主幹とする[田村 1980]として刊行された<sup>9)</sup>。

1990年代以降も、アラビア語教科書は作成され続けた。しかし、長年東京外国語大学で教鞭をとった専門家が作成した[奴田原 2002]に至っても、内容的には入門書であり、中級以上の教科書はほぼ存在しないと言ってよい。例外的に、内記良一の[内記 1989]は「くわしいアラビヤ語」と題しており、『基礎アラビヤ語』の続編となっているものの、「基礎」に続く中級編ではなく、著者が選択した文法事項を選んで詳論したものである。

以上に、やや詳しく、これらの教科書が作られた歴史的な流れを概観した。このように文法入門書が大半であったことは、日本語で用いられている文法用語が基礎的なものが主で、上級レベルでの文法的な議論やそれに関わる用語が紹介されていないという実態を生んでいる<sup>10)</sup>。

次に、文法用語リストからわかる第2の特徴として、これらの教科書で用いられている文法用語

7) 左右の向きの違う文字を扱う困難さは、コンピュータ上でマルチリンガル対応のワープロを用いて書くようになった現在もなくなったわけではない。

8) 本人の事績と草創期の対アラブ外交については、田村秀治『アラブ外交 55年——友好ひとすじに(上・下)』勁草書房、1983-1984年、を参照。

9) 日本におけるアラビア語学習教材の致命的な空白として、十分な語数・説明・例文を収録したアラビア語・日本語辞典がないことがあげられる。これは1970年代から一貫して、最大の課題とされてきた。その空白を埋めるべく「大辞典」の編纂をめざして、故高野晶弘氏が個人的な献身的努力をしていた。氏の急逝によって、残念ながら待望の辞典は完成せず、編纂作業はアインの文字まで(およそ全体の3分の2)となった[高野 2007]。現在、残りの3分の1を制作し、この貴重な遺産を完成させる作業が編集委員会方式で続けられている。

10) なお、西欧で作成された文法書を邦訳したものとして『アラビア語文典』[ライト 1987]があるが、訳語は必ずしもアラビア語文法学に基づくものではなく、制作の労苦にもかかわらず、アラビア語教育の現場でもほとんど用いられていない。

が、基本的に欧米の教科書で用いられている用語か、アラブ諸国の文法書で用いられている用語の邦訳である点があげられる。日本での独自のアラビア語文法研究に基づき、日本語で作られた用語はほぼ皆無である。欧米で用いられている用語は、もとのアラビア語におけるアラビア語文法用語を訳したのものもあるが、次節でも触れるように、西欧諸語(特に英語)の学習者を前提として、西欧語の文法用語になぞらえた用語も少なくない。

第3の特徴として、これらの用語が統一されていないことが指摘しうる。最大の理由は、著者それぞれが自らの知見に基づく文法観や教育戦略をもって執筆していることであろうが、さらに、入門書が多く書かれたために、互いに差異化を図るために独自の用語を用いようとした背景も看取される。しかし、その際に、他の教科書で用いられている用語を系統的に調査し、それらとの差異化を系統的に図ったとは思われない。そのため、教科書が増えるに従って、より合理的でより汎用性のある用語に収斂するという結果は生まれていない。ただし、主要な用語の一部は、広く普及しているために初学者にとって違和感が少ないためであろうか、それなりに継承されている。

付随的に言えば、このことと関連して、アラビア語に関する学会が存在しない、それゆえ、こうした問題について問題意識を共有し、論じるフォーラムが存在しないことも指摘しうるであろう<sup>11)</sup>。

## 2. 文法観と文法教育の戦略

### (1) アラブ世界と欧米での全般的な傾向

前節での分析から明らかなように、日本語では、これまで系統的なアラビア語文法書は刊行されていない。したがって、アラビア語文法を表現するための系統的な文法用語も整備されていない。入門書レベルの教科書は非常に豊富になってきており、学習者にとっては選択肢が広がっているが、そこで用いられている文法用語は、おおむね対象とする学習者のレベルに合わせてアラビア語文法を説明することに主眼がある。

次に、どのような文法観ないしは文法に対する考え方に基づいて、どのような文法を説明しようとするのかという点に目を向けてみよう。文法観という点からは、まず、アラブ・イスラーム世界における文法学史<sup>12)</sup>、欧米などの「外部」における文法学史<sup>13)</sup>、そして、後者の一部としての日本における文法学史<sup>14)</sup>に区分することができる。

前者、すなわちアラビア語で書かれアラビア語で論じられている文法学史は、基本的に、アラビ

11) アラビア語の専門家の絶対数が少ないことが、学会が存在しない理由としてあげられるかもしれない。しかし、同様の状況にある韓国では、2桁台の少数の学会員によってアラビア語学会が設立されている。ただし、日本に専門の学会がないとはいえ、1980年に刊行された『季刊アラビア語』(2号1981、3号1982)、それを継ごうとした『アルアラビーヤ』(1992)、さらにその流れを継ぐ「関西アラブ研究会」など、アラビア語をめぐる学術的なフォーラムを形成する真摯な努力があったことは疑いを入れない。なお、米国には、「米国アラビア語教師協会」(American Association of Teachers of Arabic : AATA)が存在する。1963年に設立され、1975年より雑誌 *Al-Arabiyya* を刊行。現会長はジョージタウン大学の Karin Ryding ([Ryding 2005]の著者)。協会設立に至る歴史的背景については [Rouchdy 1992: 211-222, 229] を参照。

12) 文法学史については、現代では、バスラ、クーファ、バグダード、アンダルス、エジプトの5つの学派を軸にその通史を概説した [Dayf 1968; al-Tantāwī 1995] が広く知られている。古典では、各文法学派を階層に分けその各層に属する文法家を列伝形式に叙述した [al-Zubaydī 1954; al-Suyūfī 2004; al-Qifī 1973]、バスラ学派の文法家に特化した [al-Sirāfī 1984] などが文法学史の基本資料となっている。

13) 個別の文法家や理論研究は別として、包括的に文法学史を論じた欧米の研究は以外と少ない。[Blanc 1975; Versteegh 1997; Carter 1990; Owens 1988] などが、限定的ではあるが文法学史を扱っている。バスラ・クーファの学派論争については [Flügel 1862; Goldziher 1994; Bernards 2005] を参照。

14) 日本では、一次資料を駆使し文法学史を概観した先駆的研究 [池田 1968, 69]、文法学の伝統的側面に焦点を当てその歴史を紹介した [中江 2002]、また文法学派に着目した研究に [内記 1968; 池田 1972] がある。

ア語使用者による文法学の歴史であり、文法学というものの性格上、規範的な性格が強い。その場合、おおまかに言って、19世紀以前の古典的な文法学の展開と、19世紀半ばのナフダ（アラブ文芸復興）以降の文法改革や現代アラビア語構築の流れとに、二分できるであろう。近現代におけるアラビア語改革については、レバノン、シリアを中心とする流れ<sup>15)</sup>、エジプトを中心とする流れ<sup>16)</sup>、それ以外の国々での動きなどに注目する必要がある<sup>17)</sup>。

欧米におけるアラビア語文法の研究は、特にアーンミーヤについては言語学からの貢献も多く、研究も盛んであるが、フスハーについては古典的なアラビア語文法の研究が多く、現代アラビア語やその改革をめぐる諸問題についての研究はあまりなされていない<sup>18)</sup>。文法学の研究と、アラビア語教科書の内容がどれだけ照応しているかは、詳細な検討を必要とすることであるが<sup>19)</sup>、本論に必要な範囲での印象的な概括を述べるならば、多くの教科書は「アラビア語教授法」という観点から学習者のニーズに合わせて構成されており、文法学の研究状況を反映させることにはさほど関心がないように思われる。

近現代におけるアラビア語改革は、豊富な内容を持っており、特にこの時期に学校文法が整備されたことを考えると、それが研究されて、教科書作成にも利用されることが望ましいであろう。これから研究と検証を進めなければならないが、とりあえずの見取り図を示すならば、近現代における文法改革の流れをおおまかに次のように見ることができる。

19世紀末から20世紀にかけて、アラブ世界では、レバノンやエジプトを中心に、古典的な文法を、より簡略な現代文法に置きかえる努力がなされた。代表的な例をあげるならば、古典アラビア語では、他の語の作用（アーミル）によって語尾変化が生じるという基本概念が通底しているが、「作用」の概念を排除して、語順が語の役割を決定しているという考え方を導入する動きがあった<sup>20)</sup>。20世紀半ばまでのエジプトでは、この流れが非常に強まった。ところが、サウディアラビアなど湾岸諸国をはじめとして、伝統的な「作用」観を維持する国々もあり<sup>21)</sup>、1945年のアラブ連盟の設立、下部機関としてのALECSO（アラブ教育文化学術機構 al-munazzama al-‘arabiya li-al-tarbiya

- 
- 15) 文芸復興および民族語としての現代アラビア語の普及に大きく貢献したアスターニーとヤーズィジーは、ともに16世紀のマロン派司祭ファルハートによる文典 [Farhāt 1995] を基礎としつつ、古典文法を簡略化した教育用文典 [al-Bustānī 1854; al-Yāzījī 1884] を編んでいる。レバノンを中心とするアラビア語改革の展開について詳しくは [Jāmi‘a al-Balamand 1998:63-82; Qāsim 1982] を参照。
- 16) イブラーヒーム・ムスタファーを中心とするエジプトの文法改革については [竹田 2006]、また現代アラブ世界の形成と文法改革の連関を論じた [竹田 2008] を参照。
- 17) エジプト、レバノン、シリア以外で、文法改革に関心が高かった地域としてイラクが挙げられる。イラク学術アカデミーを中心に、現代文法に関する提唱が多数出された。なかでも、ムスタファー・ジャウワード（1969年没）及びマフディー・マフズミー（1993年没）は文法改革に大きく貢献した人物として注目に値する [al-Qazzāz 1979:157-159, 177-181]。一方、サウジなどの湾岸諸国では伝統文法保持の傾向が非常に強く、現代語の整備と活性化を目的とする言語アカデミー設立に対しては、他地域と異なり現在でも慎重な姿勢を見せている。
- 18) 断片的ではあるがアラブ世界における文法改革を扱った先行研究に [Chejne 1965; 1969; Omran 1991; Suleiman 1996] がある。
- 19) アブドゥルアズィース（カイロ大学ダールルルーム学部言語学科教授、カイロ・アラビア語アカデミー委員）による論考 [‘Abd al-‘Azīz 1995] は、エジプトにおける文法改革と学校文法の関係を学術的に論じた先駆的な研究である。
- 20) エジプトではこの流れを汲み、1958年に従来の文法教科書とは大きく異なる用語や章立てを国定教科書に導入した。しかし3年後の1961年には、シリア・イラクの伝統派の激しい反対により新方式は中止され、結果として学校文法として定着するには至らなかった [Altoma 1976:703; Dayf 1986:48,80]。[Altoma 1969:119,120] は、国定教科書の採用に先立って1958年に刊行された教師向けマニュアル『文法学の解放』(Muṣtafā et al. 1958) を基礎資料とし、章立てと文法用語の訳語を掲載している。この文法書はイブラーヒーム・ムスタファーを中心に推し進められたエジプトの文法改革の一つの結実でもあった。
- 21) 19世紀終わりから20世紀中葉までのサウディアラビアにおける出版史を論じた [Tāshkandī 1999] では、アーミル論の代表的著作であるジュルジャーニーの『百のアーミル』およびその注釈書のタイトルが随所で挙げられており、その時期の文法学がアーミル論中心であったことをうかがい知ることができる。

wa al-thaqāfa wa al-'ulūm) の設立 (1970年)<sup>22)</sup> など、アラブ諸国の連帯と協力を推進する動きが強まると、特定の国による一方的な文法改革は有効に働かず、中庸的な文法観が定着するようになった。いわば、すべての「作用」で説明しようとする古典的で難解な学説が遠ざけられる一方、「作用」で明らかに説明できる場合と、語順と文中での単語の機能で理解した方がよい場合を統合するような文法観が広まるようになった。これは、文法学の遺産を適切に維持し、発展させるという要請と、学校文法の広がりや学習者の水準に適合した文法教育という、二つの現代的なニーズに対応するものであった<sup>23)</sup>。

しかし、このような問題は欧米での研究には反映されていない。欧米では、学習者の母語である西欧語の文法になぞらえてアラビア語文法を描写する考え方が主流で、古典アラビア語を対象とする文法学の発展や、現代のアーミーヤを対象とする言語学的な研究を反映させようとする傾向は弱い<sup>24)</sup>。上にあげた「作用」の例で言うならば、欧米の教科書は、最初から「作用」を除外して、文と単語の位置づけを語順で説明することが多い。

このような伝統は、そもそも西欧におけるアラビア語研究が19世紀後半以降、アラブの文法学者の見解を汲むよりも、西欧の文法学の考え方に合わせてアラビア語を分析する方向に進んだことによる。すなわち「19世紀の終わりに西洋で生み出されたアラビア語文法は、二種の分析が次第に分離していったことを反映していた。一つは、アラブの文法的伝統の歴史的研究であり、もう一つは、実際のアラビア語の文章を西洋における文法学の素材として分析することであった。アラブの文法学者たちと彼らの言語学的な認識についての知識が増加するにつれ、その文法システムを西洋のアラビア語文法学者たちは次第に放棄し、アラビア語の非言語学的な著作から引き出したデータに基づいて独自の言語学的な研究をするようになった」[Killean 1984: 228]。

言いかえると、欧米におけるアラビア語研究はアラブ圏での文法とは別に発展したものであり、さらに、欧米語のアラビア語教科書は、そのようなアラビア語研究の成果についてさえも、それほど注意を払っているわけではないのである。

教科書において欧米語になぞらえて説明する極端な例をあげるならば、最近刊行された[Ryding 2005]は、動詞自体を、英語と同じように「現在形 (present tense)」から始めている。こうすることによって、英語を母語とする学習者は、違和感を感じることなくアラビア語を学び始めることができるかもしれない。確かに、「彼は～した」という意味の「完了形」の動詞を「原型」とする、というアラビア語の動詞観は、初学者にとって理解しにくいものであろう。しかし、動詞の活用は実際には完了形 (perfect) を原型としており、同書でも、本文での文法の説明は「現在形」から始まっているにもかかわらず、動詞活用表では完了形から始まる表を掲げている [Ryding 2005: 475-490]。これは、同一の教科書の中に2種類の異なる説明原理を持ち込む結果を生んでおり、文法の理解として一貫性を欠くのみならず、学習者がかえって混乱する危険性を含んでいる。

22) ALECSOは、「ウンマの記憶媒体およびウンマの遺産の宝庫としてのアラビア語の保持」を機関の理念として掲げている [Zayn 1989: 204]。同機関は専門用語辞典の刊行などを通し現代語の整備と普及に努めてきたほか、[ALECSO 2003]の報告に見られるように、アラブ諸国(対象国は14)における文法教科書の内容調査の実地と分析を行うなどアラビア語教育の発展にも非常に高い関心を示してきた。

23) ALECSOは1996年にアラブ世界の学校文法教育のためのガイド[ALECSO 1996]を刊行している。そこではイウラーブを「文中における単語の職能および位置によって変化する語末母音の変化」と定義している[ALECSO 1996: 109]。この定義は古典文法におけるイウラーブの標準的な定義「語末母音の変化(イウラーブ)は、その作用語(アーミル)による作用(アマル)の結果」からの変化が見られる。

24) アーンミーヤの教科書は、逆の傾向、すなわち、アーンミーヤ研究に立脚して、最新の成果を盛り込んだ教科書を作ろうとする傾向が強いように見受けられる。特に、近年ジョージタウン大学からは各地域の口語(方言)に関するテキスト、文法書、語彙集が相次いで出版されている。

1960年代に広く用いられていたコーワンの教科書 [Cowan 1958]、1970年代に優れた教科書として高く評価されたヘイウッドの教科書 [Haywood 1962] などは、いずれも完了形・未完了形・命令形という、アラブ世界での時制に基づく動詞の活用を踏襲しているが、未完了形をめぐる「作用」については、英語的な発想を用いていた。たとえば、未完了形の動詞に「決して～しないであろう」という未来否定の辞詞（ハルフ）「lan」を付すると、末尾の母音に変化する（uならaに変わる）。伝統的なアラビア語文法では、これを辞詞による「作用」とみるが、ヘイウッドは未完了形の中に、特別な活用形（subjunctive）を作り出し、「lan」の後にはこの活用形が続くという「語順」で説明している。また、「lam」のような語尾の母音を除く作用のある辞詞が来る場合は、母音が除かれた活用形（jussive）があり、それがこのような辞詞に後続する、という説明がなされている。この方式では、未完了形は3種類の活用形を持つことになり、学習者はそれを覚えなくてはならない（作用で語尾変化する場合は、活用形そのものは1種類のみである）。

## （2）最近の欧米での教科書、文法書

欧米でのアラビア語に関する教科書、文法書の出版は、近年めざましいものがある。その背景には、グローバル化に伴うアラビア語への需要の増大、アラビア語学習者の増加などがあり、また、アラブ系の研究者や教育者が欧米の大学で活躍するようになって、アラビア語教授法の議論が深まっていることも重要な変化と考えられる<sup>25)</sup>。

以下では、少し詳しく、これらの教科書について、概観とともに、文法および文法用語の扱いという本論の関心から、検討を加えてみよう。ただし悉皆調査ではなく、教科書の選択は参考例にとどめる。

### *A New Arabic Grammar of the Written Language*, by J.A. Haywood and H.M. Nahmad

本書と次の2書は、すでに触れたように、1970年代には日本でも広く用いられていた。現代アラビア語の文法教科書としてはすでに古典的な部類に属するが、全体的な流れを見るためにも瞥見しておこう。

本書は1962年に、それまで米国で最も良く使われていたアラビア語教科書である G.W. Thacher の *Arabic Grammar of the Written Language* を基に、これに代わるものとして作られ、1965年には第2版が出された。構成としては、文字、発音の説明を含む52章の本文とクルアーン、イブン・ハルドゥーンンの歴史序説をはじめとする古典、ジョルジー・ザイダーンやターハー・フサインの著作、新聞など、バラエティーに富んだ文章を載せている。付録として、方言に関する説明、参考文献、文法についての補足的説明が付されている。それぞれの章は文法説明（文法用語には対応するアラビア語が付されている）、語彙、練習からなり、練習は英訳、作文の問題がそれぞれ20問ずつ含まれている。

このテキストは比較的詳細な文法説明がまとまった形でなされているが、教科書として用いるには問題点もいくつか見られる。まず、古典語と現代語の両方を同時に学ぶことを目指しているため、現代ではほとんど使われない事項の説明が見られる。例えば、弱子音動詞の説明の中に、yayyā（ヤーの字を美しく書く）という動詞が挙げられているが、通常の学習者は一生目にする事のない動詞であろう。感嘆の動詞の指小形に関する項目も、不要であろう。

25) 次の日本中東学会での研究報告において詳しい報告がなされた——鷺見朗子「アラビア語教授法研究の動向」（第23回年次大会、東北大学、2007年5月13日）、岡本久美子「アメリカの大学におけるアラビア語の授業について」（第24回年次大会、千葉大学、2008年5月25日）。

子音、母音の発音に関する項目などで、第1版で不十分もしくは不正確だと評されていた項目が第2版の付録で補足されているが、このような重要な点は本文中で加筆すべきであろう。また、付録で口語の説明をしているが、すでに本文中で「spoken Arabic, colloquial では～という」というように口語を一般化して説明しているのは一貫性がないし、かえって学習者に誤解を招きかねないであろう。

例文や練習問題の文章に、文法的には正しいが、現代ではあまり使われない例が見受けられる。また、付録(supplement)で1～2ページ程度の長さの文章が多く収録されているものの、本文中の練習問題では短い文しか出てこないため、学習者はアラビア語の文体に徐々に慣れ親しむことができないであろう。

上記のような問題点もあるが、この教科書は詳細な文法説明をコンパクトにまとめている点では参照用に使用することもでき、模範回答集<sup>26)</sup>がある点は独習者への配慮として評価できる。

#### *An Introduction to Modern Arabic*, by Farhat Jacob Ziadeh and R. Bayly Winder

表紙の色から日本では「グリーン本」とも呼ばれていた本書は、1957年にプリンストン大学出版から出版された。評価が高いことは、現在もこの版が出版社を変えて出版されていることからわかる。これ以前の英語で書かれたアラビア語の教科書が大学院生レベルを対象としていたのに対して、本書は外国語の学習に関し経験の少ない大学生レベルを主な対象として書かれた。このため、古典語を排し、新聞等で使われている現代アラビア語に集中している点に特徴がある。また、この教科書の重要な特徴としては、帰納法的なメソッドによる文法習得が挙げられる。

35章からなる本文は1～6章が文字と発音、7章がアラビア語の概括、8章以降が文法となっており、8章以降は、その章で学ぶ文法事項を含んだ5～15程度の短文とその英訳からなる例題の文章(illustrative text)、そこに登場した個々の単語を具体的に取り上げ、帰納的に簡潔な文法説明を行う文法分析、文法事項を再確認し、語彙を増やすための短文と英訳からなる練習文(practical text)、それぞれ5～10問の英訳と作文からなる練習問題という構成となっている。さらに付録として、55ページにわたる動詞活用表、前置詞を伴う動詞のリストが含まれており、初学者にとって実用的な入門書となっている。その反面、ある程度外国語の学習に習熟した者やアラビア語の文法、形態論や統語論を総合的・体系的に習得したいと思っている者には、帰納的なメソッドは不向きであろう。

#### *Elementary Modern Standard Arabic*, ed. by Peter Abboud and Ernest N. McCarus

「現代標準アラビア語入門」に相当する本書は、最初、1968年にミシガン大学のDepartment of Near Eastern Studiesから*Introduction to Modern Standard Arabic: Pronunciation and Writing*として出版された。その後1975年に改訂版が出版され、1983年にケンブリッジ大学出版から、現在の書名に変更されて出版された。

内容的には、1965年～1967年にかけてアメリカで開かれたアラビア語教師によるワークショップにおいて、米国及びカナダの大学生向け初級アラビア語教科書が必要であるという提言に基づき、一連のワークショップの成果をふまえて出版されたものである。1975年の改訂では、実際に授業で使用された経験がフィードバックされ、導入部の10課までを除き全面的に改訂されている。初級教科書のニーズというあたりは時代的に見て、日本と並行していることがわかる。しかし、日

26) 模範回答集は [Haywood and Nahmad 1964] として、別書となっている。



本での教科書が個人の人々の営為として執筆されたのに対して、すでに集団的な取り組みがなされていたことは注目に値する。

構成は、10課からなるアラビア文字と発音の説明である第一部と文法を扱う第二部に分かれる。第二部は45課からなり、それぞれの課は、基本テキスト、語彙、文法とドリル、聞き取り (comprehension passage)、練習ドリル (general drill) が含まれている。基本テキストと聞き取りは1～2ページの文章で、基本テキストには英訳が付されている。内容は、会話、学校生活、旅行、手紙、時事問題、文学など多岐にわたっており、様々な文章に触れることが出来るが、会話はあくまでも現代標準アラビア語の会話であり、口語の会話ではない。それぞれの課では、文法とドリル、練習ドリルあわせて10～15のドリル (それぞれのドリルは5～10問程度) があり、穴埋め、活用、作文、訳などの練習問題が供されている。

様々なジャンルにわたる豊富な例文と練習問題があり、実際にアラビア語を教えている教師による教授法を取り入れている。コーワンやハイウツドの教科書とは全く違うアプローチである。しかし、それが文法については弱点を作っている。この教授法に従って段階を踏んで徐々に文法を習得していく構成となっており、文法事項がいくつもの課に渡って分散している。例えば、動詞I形完了形の活用では、6課で3人称単数、7課で2人称単数と1人称単数、9課で複数、21課で双数と分散している。このため、一通り文法を学習した後でこの教科書を参照用に用いようとしても、あまり役立たない。

文法用語は、一部はアラビア語の文法用語も併用されているが、主として前述の教科書でも使用されている英語の文法用語が採用されている。その中には、ラテン語等の文法用語を流用した英語の文法用語も含まれている。それらは、一般の学習者にとって専門的なジャーゴンであり、英語を母語とする者にとってさえもあまりなじみのない用語であろう。最近では、平明な文法用語が使われる傾向にあることを思えば、やや古めかしく、親切とは言えない。

上に述べたように文法事項が細分化して分散しているが、事項の立て方もきわめて分散的で、体系的は全くない。たとえば、「前置詞」という包括的な項目はなく、辞詞の「*من* (min)」がそのまま項目名となっている。文法の体系的な説明がない一方、個別の項目が詳しく記述されていることは語学を実践的に習得する上では意義を持っていても、学習者の文法理解を助けるものではない。

*Standard Arabic: An Elementary-intermediate Course*, by Eckehard Schulz, Günther Krahl, and Wolfgang Reuschel

本書は、1996年に出版された *Lehrbuch des modernen Arabisch* の英語版であり、2000年にケンブリッジ大学出版から刊行され、現在広く使われている教科書である。この教科書は総合的な現代標準アラビア語の習得を目指し、標準アラビア語による会話にも重点が置かれている。

28課からなる本文は、それぞれの課が、文法説明 (文法用語には対応するアラビア語が付されている)、語彙、それぞれ1ページ程度の2つの長文 (一つは様々なジャンルの長文、もう一つは様々な状況での会話文)、練習問題からなる。練習問題はさらに語彙の練習問題、文法の練習問題、会話の練習問題、まとめの練習問題に細分化されている。巻末には、アラビア語-英語語彙集、動詞活用表、筆記練習、インデックスの他、練習問題の模範解答も付されており、独習者にも対応している。さらに、本書には、「使用者への説明」として教師 (及び学習者) 向けに授業の時間配分や、進め方に関する指針が示されていることも特筆に値する。

文法用語は、従来から英語によるアラビア語教科書で使われている用語が使用されている。それ

と共に、それらにアラビア語の文法用語が附されている。これは、上級に進む学習者、特にアラビア語で文法が記述されている文献を読む学習者にとっては、便利である。なお、該当する事項を示す文法用語が英語の用語とアラビア語の用語でそれぞれ書かれているので、内容とは対照性があるとしても、英語の用語とアラビア語の用語の間では文法用語として対照性が成立していない場合もある。

続いて、文法書を見てみよう。

*Modern Written Arabic: A Comprehensive Grammar*, by Elsaid Badawi, M.G. Carter, and Adrian Gully

2004年にRoutledge社のComprehensive Grammarsのシリーズとして出版されたこの文法リファレンスは、ある程度上級レベルにあるアラビア語学習者、現代文語アラビア語に関するデータを必要としているアラビア言語学者などを対象としている。

本文の構成は小さなユニットから大きなユニットへ、文字・音声レベルから単語レベル、句レベル、文レベルへととなっており、特にシンタックスに重点が置かれている。使用されているデータは著者が定義する「Modern Written Arabic」に従い、1990年以降のエジプトと湾岸を中心とするバスのチケットから文学作品まで、ランダムに選択された幅広い範囲の印刷物からとられている。本書は、20世紀末からの実際に記述され使われているアラビア語の文法、用法を調べるのに非常に有益であり、特に近年使われるようになった新しい用法に関しては、索引にもInnovationsとしてリストアップされている。

文法用語は主として、言語学の用語が用いられている。そのため、言語学的により正確な用語と評価することもできるが、初学者にとってはわかりにくく、文法学習の観点から見て必ずしも優れているとは言えない。

*A Reference Grammar of Modern Standard Arabic*, by Karin C. Ryding

2005年にCambridge University Pressから出版されたこのReference Grammarは、初級から上級の学習者を主な対象とし、Modern Standard Arabic (MSA)の授業や独習の実践的な補助教材として意図されている。このため、古典アラビア語からMSAまでの文法構造を包括的に取り扱うのではなく、現代の散文を読むにあたり遭遇するであろうMSAの基本的な要素に焦点を当てている。用いられているデータは、ここ10年以上の新聞・雑誌を中心に小説、ノンフィクションも使われている。本書の特徴としては初心者、特に英語文法に慣れ親しんだ英語話者に分かりやすく実践的な参照用の文法書を目指していることである。アラビア語固有の文法用語や言語学用語は、初級者にわかりやすいように、言い換えが出来る場合には英語文法で伝統的なものを用いている。また、筆者によると構成自体も英語話者にとって効果的にアラビア語の形や構造にアクセスできるように、理論的ではなく実践的な配置を試みたとしてある。

実際の構成は、全体が39章に分かれ、第1章はアラビア語の歴史や現代のアラビア語状況も含んだ概観、第2章は文字と音韻、第3章は単語構造の概観、第4章は文構造の概観、残りの章は文法事項の詳細で、第5～15章は名詞の諸形態(名詞、分詞、形容詞、副詞的対格、代名詞、数詞)、第16～19章は不変化詞(前置詞、疑問詞、接続詞)、第20～38章が動詞、第39章は条件文と願望となっている。第5～38章は形態論を中心に解説がなされ、シンタックスに関しては関連する部分に随時挿入される形となっている。

本書の用語選択や構成は、英語文法になぞらえる方式を極限化している。英語話者以外の初心者

にとって使いやすいものでないことは当然として、さらに、ある程度アラビア語の文法を学んだことのある者にも、使いにくい面がある。

前節でもすでに触れたように、本書は英語になぞらえるあまり、アラビア語動詞の原形が「完了形」であることを無視して、「現在形」を基本にした本文構成になっており、それにもかかわらず動詞活用表については、本来の完了形を基礎にせざるを得ないという二重基準に陥っている。あるべき文法用語を考える立場から言えば、批判の対象とせざるをえない。

文法用語に関しては英語文法を意識しているが、非アラブ人でもよく使うアラブ文法用語はそのまま使うものとしている。このことにより、アラブの伝統文法の記述も出てきており、英語文法になぞらえる方式との間には齟齬が生じている。

#### *Modern Literary Arabic: A Reference Grammar*, by Ron Buckley

本書は2004年にレバノン書店 (Maktaba Lubnān, Librairie du Liban) から出版された。文法書としての本書の最大の特徴は、その例文の選択と量にある。本書は長い文法説明より例文を重視しており、約12,000に及ぶアラビア語の例文・例単語が掲載されている。しかも、そのデータ・ソースは、本書が題名の通り現代文語を対象としているところから、出版までの過去10年のエジプト、アルジェリア、サウディアラビア、レバノン、パレスチナ、シリア等のアラブ人作家による11の文学作品から、豊富な用例が用いられている。ただし、著者の判断で「その作家独特の表現」とみなしたものは入れられていないというものの、現代文学のみをソースとして、現代文語を論じることの偏りは感じられる。なお例文にはその文の出典がそれぞれ記載されているので、それを確認できるのは優れた点である。

本書は上級のアラビア語学習者を主な対象とし、実用的なアプローチをとっている。その点は評価に値するが、文法という観点から言えば問題も含まれている。例えば、「動詞を含む文」を動詞文、「動詞を含まない文」を名詞文と定義している点は、大いに違和感が感じられるところであろう。アラビア語本来の文法学では、古典においても改革された現代文法においても、「動詞で始まる文」を動詞文、「名詞で始まる文」を名詞文としている。逆に、英語になぞらえて語順で構文を分類する方式では、この区別は主要な論点とはならない。その中であって、本書の独自の定義は積極的な意味を持つであろうか。

### (3) 日本のアラビア語教科書

英語で書かれた教科書の実例から明らかのように、母語になぞらえた文法的な説明をする場合、初学者にとっては難解なアラビア語が理解しやすいものとなる（少なくとも、そうなると期待される）。その点は大きな利点であろう。逆に、短所として、アラビア語の固有の考え方が提示されないこと、また、将来アラビア語の文献を読むときにアラビア語で書かれた文法の説明が理解できない、という難点が生じる。

日本でのアラビア語教科書を見た場合、この点はどうであろうか。文法用語の一覧表を検討すると、「母語になぞらえる」という点では、実際には日本語の文法に合わせた説明よりは、英語圏での説明を導入して、英語的な説明（英語を母語とした場合の説明）を用いていることが多いことがわかる。英語は日本でもっともなじみのある外国語であるから、これはそれなりに意味のあることであろう。

たとえば、未完了形の語尾変化を3種類の未完了形があるとして説明する方式は、ほとんどの教

科書が英語の文法書から輸入している。例外は〔四戸 1996〕で、ここではアラビア語の文法用語を直輸入した説明がなされている。それ自体は一つの試みとして有用であろうが、用語自体が直訳調なので、初学者には意味がわかりにくいという難点がある。たとえば、「対格」は名詞の格変化を示す用語として定着しており、「動詞の対格」という表現には、多くの学習者がとまどうであろう。京大版〔小杉・岡本・竹田 2008〕は、未完了形の語尾変化について「要求法」「接続法」は「作用の結果」と説明しているの、欧米圏方式ではないが、「要求法」「接続法」という表現は欧米圏方式の影響が残存している。

既存の用語について配慮する傾向は、一覧表を見ると、すでに広く流布して、おおむね定着している用語については、それなりに認められる。当該用語が体系的な文法説明という観点から優れているかどうかは別として、同一の（ないしは類似した）用語が用いられることは、学習者にとっては利便性がある。その一方、学習者にとって馴染みにくい用語について、それぞれの執筆者がよりよい用語を作り出そうとして、かえって難解な用語を生み出している傾向も認められる。

全体として統一性を欠いており、日本でのアラビア語文法用語が十分に成熟していないことは明確であるが、さらに一覧表を詳細に検討すると、不統一の原因の一つは、同一教科書内に用語の不統一が存在することであることが判明する。

教科書間の不統一の一例として複数形を取り上げてみよう。アラビア語の名詞・形容詞の複数形が、きわめて厳格な規則性を持つ複数形と、多数の派生形パターンに基づく複数形があること（さらに、一つの単数形に対して、しばしば二つ以上の複数形があること）が初学者にとって、語彙を暗記する上で大きな困難になっていることは周知の通りである。これらの複数形をどのような概念で説明するかを見ると、次のような状態が見られる。

もっとも単純な区分およびそれに対応する文法用語は、ほとんどの教科書で採用されている「規則複数」「不規則複数」であるが、アラビア語の派生形パターンには法則性があり<sup>27)</sup>、「不規則複数」というだけでは不正確だけでなく、学習者に、個別の複数形を果てしなく記憶しなくてはならない、という印象を与えるであろう。そこで、規則複数の代わりに「語尾複数」〔池田 1976〕「語尾複数形」〔内記 1983〕という用語もかつて提案された。語尾の定形的な変化だけで作られる複数形という意味では、この用語は適切であるが、そうでない複数形を「語幹複数」〔池田 1976〕あるいは「語内複数」〔内記 1983〕と呼ぶのは、用語自体としても矛盾を抱えている。「語幹複数」は語幹部分で派生形が展開されるという趣旨であるが、「語幹」はすでに定着している「語根」とまぎらわしい上、派生形は語根以外の文字を付加して作られるから、「語幹において複数形が作られる」ことを意味する用語とそぐわないように思われる。また、「語内複数」の場合は、語尾は「語外」とあるということになるであろうか。初学者が誤解しやすい表現であろう。

英語での用語が広く採用されていることはすでに指摘したが、英語から転用、翻訳して使うことの問題の一つとして「重訳」によって語義が曖昧になってしまうケースがある。一例をあげると、「くぼみ動詞」がある。第二語根が弱文字となっている動詞を、英語で「hollow verb」としているところからこのような訳語が作られているが、アラビア語の原語から「弱動詞」と訳する方が合理的であろう。英語では、3語根のうち2番目の語根が弱文字であるため「くぼんでいる」というイメージを使っているが、日本語に直訳してもこれはほとんど意味をなさない。さらに、「くぼみ動詞」という訳語を使っている〔飯森・黒柳 1976; 奴田原 2002〕が、第3語根が弱文字の場合は「弱動詞」

27) この点については、ラトクリフ論文〔Ratcliffe 2002; 2004〕が詳しい。そこで言われている「semi-productivity」とは、複数形のパターンが半ばは予期しうるものであることを意味している。

という用語を採用しているため、命名が統一性を欠いているとの印象が強い。

「ダブル動詞」も英語からの直訳であるが、これも日本語の用語としてわかりにくいように思われる。カタカナと漢字を混ぜるよりは、「重子音動詞」なり「重動詞」とすべきではないだろうか。

上でも触れたように、わかりにくい用語をそれぞれの著者が工夫をしたために、きわめて不統一になっている場合があるが、次はその典型的な例である——「繫辞」「現代形の連辞」「陳述（英語の be 動詞にあたる）」「いわゆる be 動詞」「be 動詞にあたる語」「連結詞」。これらの表現を見て、同じ文法の事項だと理解することはきわめて困難であろう。

逆に、アラビア語に固有の文法事項で、邦語での表現をそれぞれが工夫して多様化する結果を生みながらも、実際にはアラビア語固有の表現を併記することで問題が回避されている場合もある。「イダーファ」がその典型であろう。邦訳された用語としては、「属格による限定」「二つの名詞を結合する場合」「名詞連続」「複合名詞」「of の表現」「属格連結」「属格関係」などと分散した表現がされているが、ほとんどの教科書で「イダーファ」が併記されている。授業の現場でも教師が、直観的にわかりにくい邦訳ではなく、「イダーファ」と呼んでいる可能性は高い。

ここで検討してきたように、用語の一つ一つがアラビア語文法をよく表現しうる邦語となっているかどうかは重要な問題であるが、一覧表から、体系性が十分に確保されていないことも看取される。上で、未完了形の語尾変化について、ほとんどの場合に英語圏での説明方式である「直説法」「接続法」「要求法」が導入されていることに言及したが、この問題をさらに検討すると、上位概念と下位概念が重なっている例にも出会う。たとえば、「直説法」の代わりに「未完了形」を入れているにもかかわらず、接続法・要求法を含めて、その上位概念に「未完了形」を持ってきている〔飯森・黒柳 1976; 本田 1981-1985〕、「直説形（直接形）」「接続形」を用いながらも他で要求法とされているところを「短形」を用いて<sup>28)</sup>——「～形」という用語上の統一をはかっているものの——3つの概念的な区分がさほど明確にされない〔奴田原 2002; 佐々木 2005〕などがある。これは、教科書をそのまま読んでいく限りは特に矛盾や不整合が感じられる箇所ではないが、一覧表を作成したために一目瞭然となっている。言いかえると、全体を眺望する中で、体系性が十分でないことが読み取られるのである。

### 3. 日本におけるアラビア語教育の戦略と文法用語の近接化

本節では、これまで検討した論点に基づき、今後のあるべきアラビア語教育の戦略を考察し、さらに、文法用語の統一ないしは近接化を図る必要性およびその方法について、若干の提言をおこなう。

学部（一般教育における第2・第3外国語としてのアラビア語、専門課程における専門的な語学）および大学院でのアラビア語教育を考えた場合、学習の最終的な到達目標をどこに置くかによって、おのずと教科書やそこで説明すべき文法事項は異なってくる。

しかし、語学学習を通じて「文化の香り」を感じ取ることで視野を広める、というような水準を超えて、アラビア語を用いて業務や研究をすとなれば、フスハーの学習によって、少なくとも、プリント・メディアやインターネットにおけるリテラシーを獲得し、さらに、仕事の上で接する文書や一般書を読めるようにする必要がある。そこまでは一般的なニーズとして認識すべきであろう。

28) 「短形」という不思議な用語がどのようにして成立し、導入されたかについては、〔榮谷 2002〕が優れた論考をおこなっている。日本におけるアラビア語文法用語をめぐる貴重な先行研究の一つである。

学習者がさらに研究を志向して、専門的な文献や古典などの読解に至るかどうかは、ケース・バイ・ケースであろう。歴史研究では古典語が必要とされるが、現代研究の場合、古典的なアラビア語文献の知識はイスラーム研究やイスラーム法に関わる研究(たとえば現代のイスラーム金融理論、イスラーム政治論など)では必須であるが、分野によっては、そこまでの知識は必要とされない。古典語の必要性の度合いは、全体としては大学院などでの教育・研究内容や個別の学習者のニーズによる。文法の観点から言えば、メディア・アラビア語および一般書の読解が可能なアラビア語に対応するならば、その延長上に、より専門的な文献の読解を想定することは可能であろう。

その場合、最大の問題は、「母語／英語になぞらえた」文法説明と、アラブ圏での文法理解のギャップをどうするか、という点にある。上に触れたように、前者だけで学習するならば、専門的な文献に文法的な説明があった場合、全く理解できないことがある。

かといって、異なる二つの文法理解を同時に教えるわけにはいかない。とすれば、一つのありうべき方法は、学習者にとって容易な文法説明を主としながらも、アラビア語固有の考え方ではどのようにとらえているのかを、補足説明や注などによって補うことであろう。

その場合には、英語話者の利便を考えた説明を過度に移植している現状を改善する必要がある。そのためには、説明に用いられる文法用語を、それぞれ体系的な説明の中に位置づけられるものとする必要がある。その際に、日本語を母語とする者にとって適切な文法説明／文法用語でありながら、さらに先に進んだ場合に、アラビア語固有の文法的な考え方も理解しうるような体系を構築することは、決して不可能ではないはずである。

本論で明らかにしたように、現行の教科書で用いられている文法用語は、それぞれの教科書内での統一が図られたとしても、それ以上のことは意図されていない。文法用語の詳細な検討も、学術的な論考としては本論が日本で初めてのものであろう。そのため、相互に参照し、比較または対比した上で、体系的な説明原理を構築しようとする試みは、未だなされていない。

体系性が不足しているもう一つの理由は、中級・上級向けの教科書がほとんどなく、文法書も刊行されていないため、文法の総体を記述した上で、それらを説明するための文法用語を作ることもなされていないことによる。直接的な誘因がないため、未開拓の分野となっている。しかし、上級の教科書や文法書自体が必要であることを考えれば、未開拓のままでよい分野ではない。

ほとんどの文法用語は、アラビア語の原語からの翻訳、それらが欧米語に翻訳されたものからの重訳によって作られている。新しい概念の導入は、近代の日本では、翻訳および翻訳に必要な新語の創出によっておこなわれてきたから、このこと自体は問題ではない。直訳も造語による意識も、必要に応じてなされるべきであろう。直訳すれば「名詞文」となるものを、[新妻 2009]が「名詞先行文」としているのは、後者の例としてあげることができる。英語経由での訳語は、アラビア語の原義から遠ざかっている場合があるため、再考を要するものもある(上にあげた「くほみ動詞」など)。

果たして、文法用語を統一しうるか、と問うならば、統一のための統一は必要ない、と言うべきであろう。文法用語は、文法自体の理解に依拠し、それ自体が学説の競合を前提とするものであるから、無用に統一を意図することには意味がない。しかし、その一方で、体系的な文法理解を欠いたままに、たとえば自著の独自性を出すことを意図して、差異化を目的とした新語を造るようなことがあるとすれば、それはアラビア語教育のためにも、アラビア語文法研究の発展のためにも、有益なことではない。

アラビア語文法をめぐる論議が進展するならば、文法用語が異なる場合も、用語がその異同を的

確に表現するものとなるであろうし、そうであれば、用語の実質的な近接化が図られるであろう。当面目指すべき方向は、そのような意味での近接化であろうと思われる。

## 結び

本論では、過去40年ほどの間に日本で刊行されたアラビア語教科書を素材として、その中の文法用語を比較し、それを、文法に対する考え方とアラビア語教育戦略と結びつけながら検討を加えた。付録の「アラビア語主要テキスト文法用語対照表」によって、主要な教科書における用語の詳細が一望にできる。さらに、それに基づき、アラビア語文法のより体系的な記述と、それに立脚した文法用語の整備が必要であることを明らかにした。

特に、現行の教科書では、欧米で流布している「母語／英語になぞらえた」文法説明と、アラブ圏でなされているアラビア語自体の文法説明の間のギャップに対して、適切な対応がなされていないことが明らかとなった。より高度なアラビア語教育・学習が実施され、より専門的な文献を読む必要性が高まるとすれば、そこにギャップが生じないように、文法の説明および文法用語を整備していくことが今後の課題となっている。

※ 本論は、科学研究費補助金による「地域言語としてのアラビア語——教育戦略の検討とリソース開発」（研究代表者＝小杉泰、平成15～18年度）および「アラブ世界の活字文化とメディア革命」（研究代表者＝長沢栄治、平成18～20年）、独立行政法人日本学術振興会の「若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム（ITP）」（主担当教員＝東長靖、平成18～23年）の成果の一部である。研究会での報告や議論によって多くの示唆をいただいた皆さまに深謝申し上げたい。

## 参考文献

- 飯森嘉助 1974 『実用アラビア語会話単語集一日・英・アラビア語』 ウラオカプリンティング出版部。  
 飯森嘉助・黒柳恒男 1976 『アラビア語入門』 泰流社。  
 飯森嘉助・黒柳恒男 1999 『現代アラビア語入門』 大学書林。  
 池田修 n.d. 『アラビア語入門』（大阪外国語大学授業用教材）  
 —— 1969 「10世紀以降のアラビア語研究の歴史」『大阪外国語大学学報』 22, pp.35-49.  
 —— 1970 「9世紀以前のアラビア語研究」『オリエント』 11(3-4), pp.121-160.  
 —— 1972 「文法学派と都市」『イスラム化に関する共同研究報告5』：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp.173-209.  
 —— 1976 『アラビア語入門』 岩波書店。  
 —— 1982 「バスラ学派とクーファ学派」杉勇・前嶋信次他編『オリエント史講座4：カリフの世界』 学生社, pp.124-140.  
 池田修・竹田新編 1981 『現代アラビア語小辞典』 第三書館。  
 石原忠佳 2000 『モロッコ・アラビア語——標準アラビア語対照 会話と文法』 大学書林。  
 井筒俊彦・慶應義塾大学語学研究所編 1950 『アラビア語入門』 慶応出版社。  
 エルサムニー, アリ・ハッサン. 1966 『アラビア語読本 巻Ⅱ』 アジア・アフリカ語学院。  
 —— 1974 『アラビア語読本 巻1（第3版）』 アジア・アフリカ語学院。  
 岡野利雄・飯森嘉助監修 1978 『アラビア語会話：現代正則アラビア語 & クウェイト・イラク・ガ

- ルフ方言』豊文社.
- 門屋由紀 2006「日本の大学におけるアラビア語教育の現状とその問題——アラビア語教育の歴史とアンケート調査の結果から」『日本におけるアラビア語の現状：教育と業界のニーズ』アラブイスラーム学院, pp.1-49.
- 河井知子 2005「初級レベルにおけるアラビア語指導について」『外国語教育—理論と実践』29, pp.47-54.
- 川崎寅雄 1974a『アラビア語入門』みき書房.
- 川崎寅雄 1974b『アラブ語辞典』みき書房.
- 黒柳恒男 2002『アラビア語・ペルシア語・ウルドゥー語対照文法』大学書林.
- 小杉泰・岡本多平・竹田敏之 2008『イスラーム世界研究のためのアラビア語マニュアル2008』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科(イスラーム世界論);研究科附属イスラーム地域研究センター;若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム(ITP).
- 榮谷温子 1998「アラビア語と外国語教授法」『地域文化研究』3月号,東京外国語大学大学院地域文化研究会.
- 2002「アラビア語未完了短形の名称」『アジア・アフリカ文法研究』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)31, pp.155-163.
- 2008「アラビア語」小杉泰・林佳世子・東長靖編『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋大学出版会, pp.32-41.
- 佐々木淑子 2005『アラビア語入門(新版)』翔文社.
- 四戸潤弥 1996『現代アラビア語入門講座(上・下)』東洋書店.
- 鷺見朗子 2006『初歩のアラビア語:アラブ・イスラーム文化への招待』放送大学教育振興会.
- 竹田敏之 2006「現代エジプトにおける文法改革:イブラーヒーム・ムスタファアの古典文法批判と文部省委員会」『日本中東学会年報』22(2), pp.29-52.
- 2008「アラビア語はなぜ語尾変化をするのか——現代アラブ世界の形成と文学におけるイウラブ論争」『イスラーム世界研究』2(2), pp.105-130.
- 田中四郎 1963「アラビア語文典その1」大阪外国語大学アラビア語学研究室室内マナーラ会.
- 田村秀治編 1980『詳解アラビア語-日本語辞典』中東調査会.
- 高野晶弘 2007『高野版現代アラビア語辞典(上・下)』「アラブ世界の活字文化とメディア革命」研究会.
- 内記良一 1968「クーフア派文法学の格概念について」『東京外国語大学論集』17, pp.65-82.
- 編 1979『アラビヤ語会話練習帳』大学書林.
- 編 1980『アラビヤ語小辞典』大学書林.
- 1983『基礎アラビヤ語』大学書林.
- 1984『アラビヤ語常用6000語』大学書林.
- 1986『やさしいアラビヤ語読本』大学書林.
- 1989『くわしいアラビヤ語:語形と構文』大学書林.
- 1999『日本語アラビヤ語辞典』大学書林.
- 2004『日本語アラビヤ語辞典(ポケット版)』大学書林.
- 中江加津彦 2002「アラブ伝統文法学史構築の試み」『言語文化学会論集』19, pp.67-102.
- 2003『アラビア語会話入門——アハラン・ワ・サハラン』藤井洋書.
- 新妻仁一 2009(予定)『アラビア語文法ハンドブック』白水社.



- 西尾哲夫・師岡カリーマ・エルサムニー 1997 『エクस्प्रेस エジプト・アラビア語』白水社。  
 —— 2003 『CD エクस्प्रेस エジプト・アラビア語』白水社。  
 奴田原睦明 2002 『基本アラビア語入門』大学書林。  
 奴田原睦明・岡真理 1989 『エクस्प्रेसアラビア語』白水社。  
 —— 2002 『CD エクस्प्रेसアラビア語』白水社。  
 奴田原睦明・榮谷温子 2003 『CD アラビア語』朝日出版社。  
 本田孝一 1981-1985 『たのしいアラビア語 (1～6)』たまいらば。  
 —— 1987, 1990, 2006 『たのしいアラビア語 (7～9)』本田アラビア語研究所。  
 —— 1998 『アラビア語の入門』白水社。  
 —— 1998 『ステップアップアラビア語』白水社。  
 —— 1998 『アラビア語の入門 (改訂版)』白水社。  
 —— 2001 『アラビア語の入門 (新装版)』白水社。  
 —— 2003 『千夜一夜物語: アラビア語対訳』白水社。  
 —— 2004 『ステップアップアラビア語の入門』白水社。  
 本田孝一・石黒忠昭編 1997 『パスポート初級アラビア語辞典』白水社。  
 本田孝一・イハープ・アハマド・イバード編 2004 『パスポート日本語アラビア語辞典』白水社。  
 矢島文夫編 1966 『アラビア語基礎 1500 語』大学書林。  
 ライト、ウィリアム [編訳], C.P. Caspari 著, 後藤三男訳 1987 『アラビア語文典 (上・下)』ごとう書房。  
 ラトクリフ、ロバート 2002 「アラビア語の二重言語性から見る規範と教育」『語学研究所論集』7, pp.163-168.
- ‘Abd al-‘Azīz, Muḥammad Ḥasan. 1994. “Muḥāwalāt Taysīr al-Naḥw li-l-Nāshī’a: al-Hay’āt al-Rasmīya,” *Ḥawliyyāt Dār al-‘Ulūm*, Vol. 16, pp.25-74.
- ALECSO (al-Munazzama al-‘Arabīya li-l-Tarbiya wa al-Thaqāfa wa al-‘Ulūm). 1996. *Al-Kitāb al-Marjī ‘fī Qawā’id al-Lughā al-‘Arabīya li-Marāḥil al-Ta’līm al-‘Āmm*. Tūnis: ALECSO.
- ALECSO (al-Munazzama al-‘Arabīya li-l-Tarbiya wa al-Thaqāfa wa al-‘Ulūm). 2003. *Tahdīd Mustawayāt al-Ta’allum fī al-Riyāqīyyāt wa al-‘Ulūm wa al-Naḥw fī al-Ta’līm al-Thānawī*. Tūnis: ALECSO.
- Altoma, Salih. 1969. *The Problem of Diglossia in Arabic: A Comparative Study of Classical and Iraqi Arabic*. London: Oxford University Press.
- . 1976. “Language Education in Arab Countries and the Role of the Academies,” in T. A. Sebeok ed., *Historiography of Linguistics: Current Trends in Linguistics*, Vol.6, The Hague: Mouton, pp.690-720.
- Beeston, A.F.L. 2006(1970). *The Arabic Language Today*. Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- Bernards, Monique. 2005. “Medieval Muslim Scholarship and Social Network Analysis: A Study of the Basra/Kufa Dichotomy in Arabic Grammar,” in Sebastian Günther ed., *Ideas, Images, and Methods of Portrayal: Insights into Classical Arabic Literature and Islam*, Leiden: Brill, pp.129-140.
- Blanc, Haim. 1975. “Linguistics among the Arabs,” in T. A. Sebeok ed., *Historiography of Linguistics: Current Trends in Linguistics*, Vol. 13, The Hague & Paris: Mouton, pp.1265-1283.
- al-Bustānī, Buṭrus. 1854. *Kitāb Miṣbāḥ al-Ṭālib fī Baḥṭh al-Maṭālib*. Bayrūt: s.n.
- Carter, Michael G. and Kees Versteegh. 1990. *Studies in the History of Arabic Grammar II : Proceedings of the 2nd Symposium on the History of Arabic Grammar, Nijmegen, 27 April-1 May 1987*. Amsterdam and

- Philadelphia: J. Benjamins.
- Chejne, Anwar G. 1965. "Arabic Problem and Proposals for Reform," *Studies in Islam*, Vol. 2, New Delhi: Indian Institute of Islamic Studies, pp.195-227.
- . 1969. *The Arabic Language: Its Role in History*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Cowan, David. 1958. *Introduction to Modern Literary Arabic*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ḍayf, Shawqī. 1968. *Al-Madāris al-Naḥwīya*. Al-Qāhira: Dār al-Maʿārif.
- Farḥāt, Germanos. 1995. *Baḥṯ al-Maṭālib fī ʿIlm al-ʿArabīya*. Bayrūt: Maktaba Lubnān.
- Flügel, Gustav. 1862. *Die Grammatischen Schulen der Araber. Erste Abtheilung. Die Schulen von Basra und Kufa und die Gemischte Schule*. Leipzig: F. A. Brockhaus.
- Goldziher, Ignaz. 1994. *On the History of Grammar among the Arabs: An Essay in Literary History*. Trans. and eds. by Kinga Dévényi and Tamás Iványi. Amsterdam and Philadelphia: J. Benjamins.
- Haywood, J.A. and H.M. Nahmad. 1962. *A New Arabic Grammar of the Written Language*. London: Percy Lund, Humphries.
- . 1964. *Key to a New Arabic Grammar of the Written Language*. London: Humphries.
- Jāmiʿa al-Balamand. 1998. *al-ʿArabīya fī Lubnān*. al-Balamand: Manshūrāt Jāmiʿa al-Balamand.
- Killeen, Carolyn G. 1984. "The Development of Western Grammars of Arabic," *Journal of Near Eastern Studies*, 43/3, pp.223-230.
- Muṣṭafā, Ibrāhīm and Muḥammad Aḥmad Barāniq et al. 1958. *Taḥrīr al-Naḥw al-ʿArabī*. Al-Qāhira: Dār al-Maʿārif.
- Omran, Elsayed M.H. 1991. "Arabic Grammar: Problems and Reforms," in Kinga Dévényi and Tamás Iványi eds., *Proceedings of the Colloquium on Arabic Grammar. The Arabist: Budapest Studies in Arabic*, Vol.3-4, pp.297-311.
- Owens, Jonathan. 1988. *The Foundations of Grammar: An Introduction to Medieval Arabic Grammatical Theory*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- al-Qazzāz, ʿAbd al-Jabbār. 1981. *Al-Dirāsāt al-Lughawīya fī al-ʿIrāq*. Baghdād: Dār al-Rashīd li-l-Nashr.
- al-Qifṭī, Jamāl al-Dīn Abū al-Ḥasan. 2004. *Inbāh al-Ruwā ʿalā Anbāh al-Nuḥā*. ed. by Muḥammad Abū al-Faḍl Ibrāhīm. 4 vols., Bayrūt: al-Maktaba al-ʿAṣrīya.
- Ratcliffe, Robert R. 2002. "The Broken Plural System of Moroccan Arabic: Diachronic and Cognitive Perspectives," *Perspectives on Arabic Linguistics XIII-XIV: Papers from the Thirteenth and Fourteenth Annual Symposia on Arabic Linguistics*. pp.87-108.
- . 2004. "Semi-Productivity and Valance Marking in Arabic: the So-called 'Verbal Themes'," in Toshihiro Takagaki, Susumu Zaima, Yoichiro Tsuruga, and Yuji Kawaguchi eds., *Corpus-Based Analyses on Sentence Structures*, pp.71-84, Tokyo: UBLLI.
- Ryding, Karin C. 2005. *A Reference Grammar of Modern Standard Arabic*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rouchdy, Aleya ed. 1992. *The Arabic Language in America*. Detroit: Wayne State University Press.
- al-Sīrāfī, Abū Saʿīd al-Ḥasan ibn ʿAbd Allāh. 1984. *Akhbār al-Naḥwīyīn al-Baṣrīyīn wa Marātib-hum wa Akhdh Baʿḍi-him ʿan Baʿḍ*. ed. by Muḥammad Ibrāhīm al-Bannā. al-Qāhira: Dār al-ʿItisām.
- Stetkevych, Joseph. 2006 (1970). *The Modern Arabic Literary Language: Lexical and Stylistic Developments*. Washington, D.C.: Georgetown University Press.

- Suleiman, Yasir. 1996. "The Simplification of Arabic Grammar and the Problematic Nature of the Sources," *Journal of Semitic Studies*, 51(1), pp.99-119.
- al-Suyūfī, Jalāl al-Dīn 'Abd al-Rahmān. 2005. *Bughya al-Wu'ā fī Ṭabaqāt al-Lughawīyīn wa al-Nuḥā*. ed. by 'Alī Muḥammad 'Umar. 2 vols., al-Qāhira: Maktaba al-Khānjī.
- al-Taṭṭāwī, Muḥammad. 1995. *Nash'a al-Naḥw wa Tārīkh 'Ashhar al-Nuḥā*. Al-Qāhira: Dār al-Ma'ārif.
- Ṭāshkandī, 'Abbās ibn Ṣāliḥ. 1999. *Al-Ṭibā'a fī al-Mamlaka al-'Arabīya al-Su'ūdīya*. al-Riyād: Maktaba al-Malik Fahd al-Waṭaniya.
- Versteegh, Kees. 1997. *The Arabic Language*. New York: Columbia University Press.
- al-Yāzījī, Nāṣif. 1884. *Kitāb Faṣl al-Khiṭāb fī Uṣūl Lughā al-A'rāb*. Bayrūt: s.n.
- al-Zayn, Mājida. 1989. "al-Munazzama al-'Arabīya li-l-Tarbiya wa al-Thaqāfa wa al-'Ulūm Alecco: al-Mu'assasa wa al-Dawr wa al-Taḥaddīyāt," *Al-Fikr al-'Arabī*, Vol. 56, Bayrūt: Ma'had al-Inmā' al-'Arabī. pp.194-212.
- al-Zubaydī, Abū Bakr Muḥammad. 1984. *Ṭabaqāt al-Naḥwīyīn wa al-Lughawīyīn*. ed. by Muḥammad Abū al-Faḍl Ibrāhīm. Al-Qāhira: Dār al-Ma'ārif.

## 【アラビア語主要テキスト文法用語対照表】

[凡例と注]

## 表全体

- ・同一の文法事項で複数の用語が使用されている場合、セミコロン（；）で用語を区切ってある。
- ・該当する用語が無く文章で説明されている場合、該当箇所を「 」で括って記載してある。
- ・当該文法用語がどのような文脈・状況で使用されているかを示すために、[ ]内に補足説明を記載した。複数の用語が使用されている時、全ての用語に補足説明が当てはまる場合は、補足説明の[ ]を用語の後ろに記載してある。(用語A；用語B [補足説明はA・Bともにかかる]。[補足説明A]用語A；[補足説明B]用語B = 補足説明は個別になっている。用語A；[補足説明B]用語B = 用語Bにのみ補足説明。)
- ・当該文法用語がどのような文脈・状況で使用されているかを示すために、原文の前後の文章を | | 内に記載した。
- ・丸括弧（ ）は原文に記載されている（ ）である。
- ・ひとつのテキストの中で、同一の文法事項に関して複数の用語が使用されている場合、最も多く使用されている、またはその文法事項の独立した項目で使用されているものに、\*を記した。
- ・上位区分、下位区分を示すために下位区分をインデントし、区切り線を破線と記載した。

例：

項目 A
項目 B
項目 C
項目 D
項目 E
項目 F

となっている場合、項目Aの下位区分に項目B、C、Fがあり、項目Cの下位区分に項目D、Fがあることを示す。

## 各テキスト

[池田 1976]

- ・「日本語 アラビア語 翻字」と表記されているものは、原文では「アラビア語 翻字」は初出のみ記載されている。
- ・第22課 韻文に出てくる文法用語はこの表には含まれていない。

[飯森・黒柳 1999]

- ・「日本語 翻字」、「日本語(翻字)」と表記されているものは、原文では、「翻字」は初出のみ記載されている。
- ・本論ではフスハーを取り扱うので、「第3編 文語と口語」に出てくる用語は、一部の例外を除き、表に含まれていない。

[内記 1983]

- ・本書では、注に重要な文法事項が記載されていることが多いので、注に出てくる用語は[注より]とした。
- ・巻末の文法用語一覧にのみ記載されている用語があるので、文法用語一覧に出てくる用語は[文法用語一覧より]とした。なお文法用語一覧には対応するアラビア語による文法用語が記載されているが、これは省略した。
- ・[内記 1983] 3～10の基数詞に関して、ثلاثة～ عشرةを女性とし、「対性の法則」により名詞と数詞が反対の性になると説明している。
- ・(名詞、形容詞の)性に関する単独項目が無く、第十二課「もの」を示す名詞複数形の中で“女性名詞”と一カ所出てくる以外は、男性名詞/女性名詞という用語は使用されていない。
- ・語根に関して、まとめて述べる場合には“語根”・“三子音”と2つの表現が出てくるが、3つの語根のそれぞれを指す場合は、「第一語根…」という表現はなく、「第一子音…」としている。

[四戸 1996]

- ・本書では、3～10の基数詞に関して、ثلاثة～ عشرةを女性とし、「助数詞の単数のときの性が男性であれば、数詞は女性を使い、そうでなければ男性を使う。」と説明している。
- ・動詞過去形(完了形)を人称に応じて活用するとは説明せず、動詞語幹に人称代名詞の特別な形(人称代名詞接続形)が接続すると説明している。つまり、ذَهَبَ (動詞語幹) + تَ (一人称単数の人称代名詞接続形)でذَهَبْتَとなる[四戸 1996 上: 186]。人称代名詞接続形と言う用語は、この用法とは別に、いわゆる接尾代名詞を指すのにも使われている。
- ・動詞現在形(未完了形)に関しては、「第3章 動詞」では、動詞現在語幹を“動詞現在語幹の前に置かれる文字「人称文字」と“動詞現在語幹の後に置かれる音”で挟み、動詞の主語を表すと説明しており、動詞語幹に人称代名詞が付くとは説明していないが、「第7章 動詞の音声問題」では、これらを動詞現在語幹と接続される人称代名詞主語と説明している。
- ・動詞現在には、主格/対格/無母音格の3つがあり、語尾の音で区別されるとしている。
- ・語根という表現も使われるが、それとは別に動詞語幹を構成する文字を語幹第\*文字、語頭第\*文字(語頭から数えた場合)、語尾第\*文字(語尾から数えた場合)と表現している部分も多い。

(特徴母音の説明、分詞の作り方 etc.)

- ・ ʾَ ʾِ ʾُ をまとめて「نの読み方」として一つの項目で扱っている。
- ・ “動詞基本形”という用語を、派生形に対して基本形 (=いわゆる第Ⅰ型) と説明しているが、一部箇所では、同じ基本形という用語を用い「動詞は過去形が基本形となる」と説明している。
- ・ ハムザ動詞を不規則動詞の範疇に入れていない。

[奴田原 2002]

- ・ 「日本語 翻字 アラビア語」、「日本語 (アラビア語)」と表記されているものは、原文では「アラビア語 翻字」は初出のみ記載されている。

[新妻 2009]

- ・ 3～10の基数詞に関して、ثلاثة～عشرةを女性とし、数えられる対象が男性名詞の場合、数詞は女性形 (ةがついている形) を用いる、と説明している。

[佐々木 2005]

- ・ 本書では、命令形は未完了形の項目内で説明され、活用表も未完了形の活用表に載っているが、直説形 / 接続形 / 短形とは分離して書かれており、命令形を未完了形の下位区分として扱っているのか、完了形 / 未完了形 / 命令形を同じレベルで扱っているのか曖昧である。

[小杉・岡本・竹田 2008]

- ・ 本書では、未完了形動詞を「人称による変化」と「語尾変化 (直説法 / 要求法 / 接続法)」があるとしている。

[本田 1998; 2004]

- ・ 『アラビア語入門』(1998) と 『ステップアップアラビア語』(2004) を 2 冊組として扱い、『ステップアップアラビア語』に記載されている文法用語は斜体で表記した。
- ・ 「وで始まる動詞」は不規則動詞の項では説明されていない。
- ・ くほみ動詞の下位区分として、第 2 語根の実体が وであるか يであるかではなく、未完了形の見え目が ū / ī / ā のいずれになるかで区分されている。
- ・ (第 3 語根が弱子音となる) 弱動詞の下位区分として、第 3 語根の実体が وであるか يであるかではなく、完了形の見え目が ِ / َ / ُ のいずれになるかで区分されている。
- ・ 未完了形直説法 / 直接法という概念は出てこず、未完了形の語尾の母音を a / スクーンに変えることにより接続法 / 要求法を作ることができるという説明をとっている。

[鷺見 2006]

- ・ 本書は、放送大学のテキストであり、基本的な文法説明のみの構成となっている。(弱子音動詞・派生動詞・接続法・要求法等の文法事項は記載されていない。)
- ・ 動詞は未完了形から学習する構成となっている。

アラビア語主要テキスト文法用語対照表

「アラビア語入門」池田	「現代アラビア語入門」黒柳・飯森	「基礎アラビア語」内記	「現在アラビア語入門講座」四戸	「アラビア語の入門」,「ステップアップアラビア語」本田	「基本アラビア語入門」奴田原	新版「アラビア語入門」佐々木	「初歩のアラビア語(06)アラブ・イスラーム文化への招待」鷲見	「イスラーム世界研究のためのアラビア語文法マニュアル」小杉	「アラビア語文法ハンドブック」新妻
単独形	独立形	独立形；単独形〔説明文中のみ。基本的には文字が後続する形と語末形の区別のみ〕	後に文字を続けない形	基本形	独立形	独立文字	独立形	独立形	独立形
	結合形		続けた形	連結する形		連続文字			連結形
左接続形	尾字	語末形		語尾の形	語尾	尾字	尾形	語末形	語尾形
左右接続形	中字		文字と文字の間	語中の形	語中	中字	中形	語中形	語中形
右接続形	頭字		後の文字と続ける形	語頭の形	語頭	頭字	頭形	語頭形	語頭形
			基本文字						
			変形文字 (ى, ة)						
太陽文字 حروف شمسية (hurūf shamsiyya)	太陽文字 hurūf shamsīya	太陽文字	「定冠詞の後に ت ت …の音が来る場合は、定冠詞 』アルの 』ルは読まないで、その後にくる、これらの音を強く発音する」	太陽文字	太陽文字 ( حروف شمسية )	太陽文字	太陽文字	太陽文字	太陽文字 ( حروف شمسية )
月文字 حروف قمرية (hurūf qamariyya)	月文字 hurūf qamariya	太陰文字		月文字	月文字 ( حروف قمرية )		月文字		月文字 ( حروف قمرية )
病気文字 حروف العلة (hurūfu l-'illa)	弱文字 (hurūf-l-'illa)				弱文字 ( حروف العلة )	弱文字		弱い文字；弱文字*	
弱子音	弱子音	弱子音			弱子音			弱子音	
母音符号 ( شكل shakl)		母音符号 [- 文法用語一覽より]			母音符号シャクル شكل šakl	母音符号	母音記号		
長母音符号	「長母音 ā, ī, ū は下記のように表される」	「長母音の書き表し方は次の通りである…」	長母音の表記「長母音を表記する場合は、似た音を持つ文字か、あるいは…」	長母音	長母音 「ア (ā) は母音ファトハ فتحه の後ろに…」	長母音符号	長母音の表し方「ファトハが付いた文字の後ろにアリフを付ける。…」		
短母音符号	短母音記号	「母音は文字の上又は下に次の如く…」	短母音符号	短母音符号		短母音符号			短母音記号
فتحة (fatḥa)	fatḥa	ア 文字の上の ˆ の符号；[注より]ファトハ ( فتحه )	ア：文字の上に左下がりの斜めの線を入れる	ファトハ	ファトハ فتحة fatḥa ; a (ファトハ)*	ファタハ	ファトハ		ファトハ
كسرة (kasra)	kasra	イ 文字の下 の符号；[fa'ila 型動詞の説明中に]イ (カスラ, كسرة)	イ：文字の下に左下がりの斜めの線を入れる	カスラ	カスラ كسرة kasra ; i (カスラ)*	キャスラ	カスラ		カスラ
ضمة (ḍamma)	ḍamma	ウ 文字の上 の符号；[fa'ula 型動詞の説明中に]ウ (ダムマ, ضمة)	ウ：文字の上にワー文字のような形を書く	ダンマ	ダンマ ضمة ḍamma ; u (ダンマ)*	ダンマ	ダンマ	ダンマ	ダンマ
سكون (sukūn), جزمة (jazma)	スクーン (sukūn)	無母音 文字の上 の符号	無母音符号 ˆ	子音符号；スクーン	スクーン sukūn	子音符号スクーン	スクーン；無母音記号；スクーン [sukūn]		スクーン
二重子音符号 شدة (shadda)	シャッダ (shadda)	シャッダ (šaddah) 又はタシュディード (tašdi:d)	シャッダ	シャッダ記号	「 ˆ 」シャッダ šadda شدة	促音符号シャッダ	シャッダ；重子音記号；シャッダ [shadda]		シャッダ
タンウィーン تنوين (tanwīn)	タンウィーン (tanwīn)	n 音付加 (タンウィーン tanwīn)	語尾の ン の音；タンウィーン：[タンウィーンの ン と双・複数語尾のヌーンを含めて語尾の ン とし、その中でタンウィーンのことを指し]符号表記の ン [2章アラビア語のエッセンスのまとめの中の定冠詞より]	タンウィーン	タンウィーン tanwīn تنوين	タンウィーン	タンウィーン [tanwīn]	タンウィーン (「ヌーン (n) を付けること」)	タンウィーン
الف مقصورة (ʿalif maqṣūra)	アリフ・マクスーラ (短音アリフ)	[ア-の書き方の特例として説明]「語末で子音 ى を書く…」*；[- 文法用語一覽より]短音化アリフ	アリフ・マクスーラ		アリフ・マクスーラ ( ى )	アリフマクスーラ	アリフ・マクスーラ [ʿalif maqṣūra]	アリフ・マクスーラ (制限されたアリフ)	
ʿalif mamdūda	アリフ・マムドゥーダ	長音化アリフ [- 文法用語一覽より]	ハムザ文字と母音「ハムザ文字の後に長母音ア-が来る場合…」		アリフ・マムドゥーダ ( ا )		アリフ・マムドゥーダ	アリフ・マムドゥーダ	

「アラビア語入門」池田	「現代アラビア語入門」黒柳・飯森	「基礎アラビア語」内記	「現在アラビア語入門講座」四戸	「アラビア語の入門」,「ステップアップアラビア語」本田	「基本アラビア語入門」奴田原	新版「アラビア語入門」佐々木	「初歩のアラビア語(06)アラブ・イスラーム文化への招待」鷲見	「イスラーム世界研究のためのアラビア語文法マニュアル」小杉	「アラビア語文法ハンドブック」新妻
マッダ مَدَّة (madda)	マッダ (madda)	マッダ maddah, 延音符号: [--- 文法用語一覧より] 長母音アー (ī)		マッダ記号	「」マッダ madda ِ	マッダ ー	マッダ記号: マッダ [madda] 記号		マッダ
省略符号									
[序論より] 格表示母音: 語末母音						語尾の母音: 格尾辞	語末母音: 格母音		
ハムザ	ハムザ	ءハムザ (hamzah)	ハムザ; ハムザ文字	ハムザ	ハムザ hamza  همزة 「ء」	ハムザ	ハムザ [hamza]		ء (hamza)
همزة القطع (hamzatu l-qaṭ'i)	ハムザトル・カタア hamzatu l-qaṭ'i [ 翻字原文のママ]	断続ハムザ [--- 文法用語一覧より]			切るハムザ・ハムザトルカタイ (hamzatu l-qaṭ'i  همزة القطع)		ハムザトルカタア [hamzatu l-qaṭ'i] (= 切れるハムザ)		ハムザトルカトウ
همزة الوصل (hamzatu l-waṣli) 一時性のハムザ	ハムザトル・ワスル hamzatu l-waṣl	連続ハムザ [--- 文法用語一覧より]	「定冠詞は前に…アルのAは読まない」		結ぶハムザ・ハムザトルワスル (hamzatu l-waṣl  همزة الوصل)	ハムザトルワスリ; 一時性のハムザ	ハムザトルワスル [hamzatu l-waṣl] (= つながるハムザ)	一時性のハムザ	ハムザトルワスル
وصلة (waṣla)	ワスラ記号	ـワスラ (wasla, 連続符号)		ワスラ記号	「-」ワスラ (waṣla  وصلة) 記号	ワスラ	ワスラ: ワスラ記号: ワスラ [waṣla] 記号		ワスラ
補助母音		「二語の連結部に発音上の便宜のために i 母音が…」	補助母音	「…هل 和 ال 的 じ が子音で つづいて発音しにくい ため, هل 和 …」	「… 的 後に定冠詞がくると 次の子音とぶつかるので, カスラを与えて هل 和 …」; 「子音の衝突を避けるために付けられた母音」		補助母音		補助母音
[ハムザの] 支え	[ハムザの] 台	「文字 ʔalif (ا) の上または下に記されるが, و, ي, ى がある。ワーと一緒に: و …」	ハムザ文字の表記「ハムザ」には4通りの書き方がある。ワーと一緒に: و …」		(ハムザの) 支え	[ハムザの] 土台	ハムザの台		「ハムザが語中にきた場合、ハムザの表記は、その前にある母音記号との力関係によって決定…」 [ハムザの書き方より]
「名詞と形容詞は、厳密には区別されておらず…」	「名詞(形容詞)には…」 [格変化の説明中で]		「アラビア語では、形容詞を名詞に分類している。…」 [「形容詞」より]					イスム(名詞・形容詞)	
名詞	名詞	名詞	名詞	名詞	名詞	名詞	名詞	名詞	名詞
形容詞	形容詞	形容詞	形容詞*: 「どんな常態かを述べる」語	形容詞	形容詞 (الصفة)	形容詞	形容詞	形容詞	形容詞
			転成名詞 [分詞が名詞として用いられること]						
定冠詞 ال (al)	定冠詞 ال (al)	「限定を表す」接頭辞 ال* [--- 文法用語一覧より] 限定辞	定冠詞	定冠詞 al	定冠詞 ال*: [文法用語(一覧)より] 定冠詞 أداة التعريف	定冠詞 ال [al]	定冠詞 ال ['al / アル]		定冠詞 ال
				「人間を表す名詞の…」	理性的グループ (عقل: 主に人間を対象とする語彙)	人間	「人間を示す…」	理性存在(人間)	「人間(～する人、～である人)やその職業、地位を意味する名詞…」
「人間以外のものを示す…」	「人間に関するものを除き…」	「一般にももの複数に女性に…」 [注より]	人間以外の複数	「物(動物も含む)を表す名詞の…」	非理性的グループ (غير عقل: 主に動物やものを対象とする語彙)	人間以外	「人間以外を示す…」	非理性存在(モノ)	非人間名詞(物を意味する名詞)
第一語根	第一語根	第一子音	第一語根	第一語根	第1語根	第1語根			第1語根
第二語根	第二語根	第二子音	第二語根	第二語根	第2語根	第2語根			第2語根
第三語根	第三語根	第三子音	第三語根	第三語根	第3語根	第3語根			第3語根
			第四語根						
4子音語根			4文字語根		4語根				4語根動詞
性	性	性		性				性	
男性	男性	男性	男性	男性	男性: [文法用語(一覧)より] 男性 المذكر			男性	
女性	女性	女性	女性	女性	女性: [文法用語(一覧)より] 女性 المؤنث			女性	
	自然の性		自然の性	自然の性	自然の性	自然の性	自然の性	自然性	
男性名詞	男性名詞		男性名詞	男性名詞	男性名詞	男性名詞	男性名詞		男性名詞
女性名詞	女性名詞	女性名詞	女性名詞	女性名詞	女性名詞	女性名詞	女性名詞		女性名詞

「アラビア語入門」池田	「現代アラビア語入門」黒柳・飯森	「基礎アラビア語」内記	「現在アラビア語入門講座」四戸	「アラビア語の入門」、「ステップアップアラビア語」本田	「基本アラビア語入門」奴田原	新版「アラビア語入門」佐々木	「初歩のアラビア語(06)アラブ・イスラーム文化への招待」鷲見	「イスラーム世界研究のためのアラビア語文法マニュアル」小杉	「アラビア語文法ハンドブック」新妻
単数	単数	単数	単数	単数	単数*	単数	単数	単数	単数
双数	双数	双数	双数	双数	双数*	双数	双数	双数	双数
複数	複数	複数	複数	複数	複数*	複数	複数	複数	複数
			単数語幹[活用語尾を除いた部分]						
			語幹語尾[活用語尾を除いた語幹の最後の部分]						
語尾複数*:[分詞の項目でのみ]規則複数	規則複数	語尾複数形*:[-- 文法用語一覧より]正則複数	規則複数	規則複数	規則複数*:[文法用語(一覧)より]規則複数 الجمع السالم	規則複数	語尾複数	定型複数	規則複数
語幹複数*:[分詞の項目でのみ]不規則複数	不規則複数	語内複数形*:[-- 文法用語一覧より]破則複数	不規則複数	不規則複数	不規則複数*:[文法用語(一覧)より] الجمع التكمير 不規則複数	不規則複数	語幹複数	非定形複数	不規則複数
主格 (الرفع 'ar-raf'u)	主格	主格	主格	主格	主格 (الرفع)	主格	主格	主格	主格
属格 (الجر 'al-jarru)	所有格	属格	属格	属格	所有格 (الجر)	所有格	属格	属格	属格
对格 (النصب 'an-naşbu)	对格	对格	对格	对格	目的格 (النصب)	对格	对格	对格	对格
					斜格 [双数・複数で目的格と所有格を指す]				
								自然態*: 自然状態 [イスラムの場合は主格 + 非限定の状態]	
格変化 (الاعراب 'al-i'labu)	格変化	格変化		格変化*: 語尾変化	格変化 (الاعراب)			格変化: 語尾変化*	格変化
三段変化	三段変化	三段変化	[「単数の格」より]単語の語尾にンの音がある場合:[名詞の格より]ンの音を含む形*	3段変化	3段変化	3段変化		三段変化	基本3段変化
		末弱名詞							
「語末が<سي>または<و>となっているものは…」		主格が-inで終わる末弱名詞						特殊二段変化(下二段)	変則
[三段変化の]三格共通		三つの格が共に-anで終わる末弱名詞	(名詞、形容詞の音声問題)	語尾変化をしないもの				特殊上一段変化	無変化
二段変化	二段変化	二段変化	[単語の語尾にンの音が無い場合のこと][「単数の格」より]そうでない場合:[名詞の格より]ンの音を含まない形*	2段変化	2段変化	2段変化		上二段変化	2段変化
[二段変化の]三格共通								一段変化(上一段)	
	特定の名詞に適用される 特殊変化[語句のみ、説明は省略されている]								
人称代名詞	人称代名詞	人称代名詞: 代名詞	人称代名詞	人称代名詞	人称代名詞*: [文法用語(一覧)より]代名詞 ضمير	人称代名詞		人称代名詞	人称代名詞
人称代名詞(独立形)	独立形*: 独立人称代名詞		人称代名詞分離形	人称代名詞(主格)	人称代名詞の主格	人称代名詞独立形(主格)	独立人称代名詞	人称代名詞(独立形)*; 人称代名詞(主格)	人称代名詞独立形
人称代名詞(接尾形): 接尾代名詞*	非分離形*: 非分離人称代名詞	接尾代名詞	人称代名詞接続形	人称代名詞属格: 人称代名詞属格(所有格); 人称代名詞(对格)	人称代名詞の目的格と所有格	人称代名詞非分離形(所有格・对格)	接尾人称代名詞	人称代名詞(接続形)*; 人称代名詞(属格/对格)	人称代名詞結合形
[動詞の]人称別の変化形			[動詞の主語として動詞に接続される人称代名詞]人称代名詞接続形: 人称代名詞主語						「主語を示す役割を持った接尾辞…」



「アラビア語入門」池田	「現代アラビア語入門」黒柳・飯森	「基礎アラビア語」内記	「現在アラビア語入門講座」四戸	「アラビア語の入門」、「ステップアップアラビア語」本田	「基本アラビア語入門」奴田原	新版「アラビア語入門」佐々木	「初歩のアラビア語(06)アラブ・イスラーム文化への招待」鷺見	「イスラーム世界研究のためのアラビア語文法マニュアル」小杉	「アラビア語文法ハンドブック」新妻
			指示詞						
			場所を指し示す指示詞						
指示代名詞 ( اسم الإشارة ) [ 指示代名詞 ] 単独型 [ 指示代名詞 ] 複合形	指示代名詞	指示代名詞	対象物を示す指示詞	指示代名詞	指示代名詞 ( اسم الإشارة )	指示代名詞	指示代名詞	指示代名詞	指示代名詞
近指示代名詞	近称	近称指示代名詞			「これ」を表す指示代名詞	これは、この、指示形容詞この～(会話編)	これ(近いものを指すとき)	近接指示代名詞	指示代名詞(近称)
			聞き手を示す人称代名詞接続形 ٤ と組み合わせて、中距離にあるものを示す						
遠指示代名詞	遠称	遠称指示代名詞	聞き手を示す人称代名詞接続形 ٥ と、遠い場所を示す ٦ ラームを組み合わせて、遠距離にあるものを示す	遠くのもの指す指示代名詞	「あれ」を表す指示代名詞	あれは、あの	あれ(遠いものを指すとき)	遠隔指示代名詞	指示代名詞(遠称)
		近称複数指示代名詞 遠称複数指示代名詞 双数指示代名詞(近称)							
	指示形容詞 ( (この、あの) )		[ 指示詞の ] 形容詞的用法	指示形容詞	指示形容詞	指示形容詞	「この○○」、「あの○○」の用法		
色や不具を示す形容詞	色および身体の欠陥を示す形容詞		色や不具を表す形容詞	「基本色を表すアラビア語の形容詞は…」	色や体の特別な状態を表す形容詞	色形容詞；色、および体のハンディキャップを表す形容詞；[資料編より]色を表す形容詞		色彩を表す形容詞	色を示す形容詞
									形容詞の副詞的用法
		形容動詞 [ ٧ 型の動詞を指している ]							
[ 項目著として ] 比較級・最上級*；[ 後の課で名称のみ記載 ] 優劣表示名詞 ( اسماء التفضيل )	比較級、最上級	[ 項目名 ] 比較と最上の表現；[ 比較の形容詞の形を表す、比較(級)の表現を表す ] 形容詞の比較形*；[ 比較の形容詞の形を表す ] 比較形容詞；最上級の表現	比較の形容詞	比較級、最上級	比較級、最上級	比較級、最上級		比較・最上級	比較級、最上級
関係形容詞 ( اسماء النسبة )	関連形容詞 [ 第3編 文語と口語に記載 ]	関連詞 ( نِسْبَة )		関係形容詞 ( 国名などの名詞から作られる形容詞 )		「国の名を基に ٨ をつけると、～人となります。」[ 会話編より ]	ニスバ語尾 [ 「…は○○人です」の表現より ]	関係(関連)形容詞 (ニスバ形容詞)；関係形容詞*；関連形容詞	ニスバ形容詞
場所と時を示す名詞 ( اسماء المكان والزمان )	場所を示す名詞	[ 注より ] 「…語頭の ٩ が「場所」を示す例が多い」；[ もの、ことを示す語内複数の説明中 ] 「語頭の ma は「場所」を示すが…」	場所と時の名詞		場所や道具をあらわす [ ١٠ ]	場所名詞		時 / 場所名詞	場所を示す名詞
器具名詞 ( اسماء الآلة )	道具を示す名詞		道具の名詞		場所や道具をあらわす [ ١١ ]	道具名詞		道具名詞	道具を示すパターン
同族目的語			同族目的語、回数名詞			同族目的語		同族目的語 [ 対格の特別な用法 ]	[ 同族目的語 ] 行為の強調や内容や種類を示す動名詞；回数を示す動名詞 ( 個別名詞 ) = ١٢
能動分詞の強意形			強調分詞						
[ 分詞類似形容詞の ] 強意形；強意形容詞			強調分詞；強調形容詞						
集合名詞	集合名詞	集合名詞 [ -- 文法用語一覧より ]	「木、バラ、鳩など植物や動物などの類を表す名詞など…」 [ 個数名詞より ]	集合名詞	集合名詞	集合名詞	集合名詞	集合名詞	集合名詞
個体表示名詞 ( اسماء الوحدة )	「集合名詞に女性語尾 ١٣ をつけると、その個を表す…」		個数名詞	「集合名詞の語尾に ١٤ を付けると「ひとつの…」という意味に…」	「…単一性、固有性を表すのに ١٥ をとります。」		個数名詞		個別名詞 = ١٦

「アラビア語入門」池田 黒柳・飯森	「現代アラビア語入門」 黒柳・飯森	「基礎アラビア語」内記	「現在アラビア語入門講 座」四戸	「アラビア語の入門」、「ス テップアップアラビア 語」本田	「基本アラビア語入門」 奴田原	新版「アラビア語入門」 佐々木	「初歩のアラビア語(06) アラブ・イスラーム文化 への招待」鷺見	「イスラーム世界研究の ためのアラビア語文法マ ニュアル」小杉	「アラビア語文法ハンド ブック」新妻
多数表示名詞 (اسماء الكثرة)									
容器表示名詞 (اسماء الوعاء)									
抽象概念表示名詞 (اسماء الكيفية)			概念を表す名詞 [「抽象 概念を表す場合には名詞 の語尾に <i>يَّة</i> … ]		抽象名詞				抽象概念名詞 = <i>س</i> [ニス バと抽象概念名詞 = <i>س</i> より]
縮小名詞 (اسماء التصغير)	縮小形 [第3編 文語と 口語に記載]	名詞の指小形；指小名詞	縮小名詞						名詞の縮小形
			مで始まる名詞 (音声上 の問題…)						
			様態名詞 [動詞で示される 行為や存在がどのような状 態でなされたり、あるいは 存在しているかを示す…]						
			動詞として使われる名詞 [هيهات، أه، حي، هلم، هاك etc.]						
名詞文	名詞文	名詞文 (名詞で始まる 文)[-- 文法用語一覧より]	名詞文；大文 [名詞文の 中で、動詞を含み、主語 が動詞より前に置かれて いる文]		名詞文 (الجملة الاسمية)	名詞文	名詞文	名詞文	名詞先行文
	「AはBである」の文	限定名詞 + 不定形容詞 の形式 (主語 + 述語…)	状態と存在の文；「何は ～だ」「何は～にある」「～ に～がある、いる」とい う文では…」			「AはBです」の文章	「AはBである」(等位文)	「A = B」文	「私は～です」という場 合
主語	主語	主語	主語	主語	主部 (名詞文の) المبتدأ； 主語 الفاعل [文法用語 (一 覧)より]	主語	主語；主部 (主語)	[名詞文の基本より]主 語；[名詞文と動詞文よ り。名詞文]主題；[名 詞文と動詞文より。動詞 文]行為主体	主語
繫辞	現代形の連辞	「陳述 (英語の be 動詞に あたる) の役割…」 [注 より]				be 動詞；いわゆる be 動 詞		be 動詞にあたる語 (copula)	連結詞
述語	述語	述語；[-- 文法用語一覧 より]述語 (直訳は、知 らせ)	述語	述部	述部 الخبر [文法用語 (一 覧)より]	述部	述部 (述語)	[名詞文の基本より]述 語；[名詞文と動詞文よ り。名詞文]情報	述部
	補語 [「AはBである」 文のB]		補語 [「何はなんだ」の 文の「なんだ」]						
目的語	目的語	目的語 直訳は行為を受 けるもの [-- 文法用語一 覧より]	目的語		目的語 المفعول [文法用語 (一覧)より]	目的	目的語	目的語；[名詞文と動詞 文より。動詞文]行為対 象	
動詞文	動詞文	動詞文 (動詞で始まる文) [-- 文法用語一覧より]	動詞文	動詞文	動詞文 الجملة الفعلية	動詞文	動詞文	動詞文	動詞先行文
			大文 [主語が動詞より前 に置かれている文]						
			小文 [大文の述部を構成 している文章]						
動詞	動詞	動詞	動詞	動詞	動詞	動詞	動詞	動詞	動詞
語根	語根	語根；[弱動詞の説明中 に語根と同義で使用]三 子音	語根		語根	語根	語根	語根	語根
3子音根動詞			3文字語根動詞					3語根動詞	3語根動詞
4子音根動詞	四語根動詞		4文字語根動詞	4語根動詞	4語根動詞	4語根動詞	4語根動詞	4語根動詞	4語根動詞
強動詞	規則動詞	強動詞 [-- 卷末活用表よ り]	規則動詞 [動詞語幹の形 が1つであるもの]	規則動詞	規則動詞			正動詞 (純3語根動詞)	
動詞原形；原形動詞 [派 生形にたいして]	原形；原形 (基本形、第 一形) [派生形に対して]	動詞基本形*；[注より] 語根型動詞 [派生型に 対して]	動詞基本形 [派生形に 対して]	[完了形3人称単数男性] 動詞の原形；[派生形に 対して]基本動詞；[派生形 に対して]第1形 (基本動詞)	基本形；原型 [派生形に たいして]		動詞の代表形 [完了形3 人称単数]	動詞原型 [完了形3人称 単数男性]	原形 [派生形に対して]

「アラビア語入門」池田	「現代アラビア語入門」黒柳・飯森	「基礎アラビア語」内記	「現在アラビア語入門講座」四戸	「アラビア語の入門」,「ステップアップアラビア語」本田	「基本アラビア語入門」奴田原	新版「アラビア語入門」佐々木	「初歩のアラビア語(06)アラブ・イスラーム文化への招待」鷲見	「イスラーム世界研究のためのアラビア語文法マニュアル」小杉	「アラビア語文法ハンドブック」新妻
動詞派生形	動詞派生形	派生型動詞	動詞派生形	派生形	派生型	派生型		派生型	動詞の派生形
第II形～第XV形	第二形～第十五形	派生第II型～第X型	3語根1形～10形(3文字語根1形～); 4語根1形～4形(4文字語根1形～)	第2形～第10形	第2型～第15型	2形～15形		第II型～第XV型	派生形第2形～第15形
完了形(الماضي)	完了形	過去形	動詞過去	完了形	完了形(Perfect الماضي); 完了形・perfect*	完了形	完了形	完了形	完了形
未完了形(المضارع)	未完了形	非過去形	動詞現在	未完了形	未完了形(Imperfect المضارع)	未完了形	未完了形	未完了形	未完了形
直説法	未完了形*: [接続法の説明中に一カ所のみ]基本形	[要求法、接続法の説明中で]直説法*; [要求法・接続法が出るまでは]非過去形	動詞現在主格	未完了形	[接続形/短形がでるまで]未完了(直接)形(Imperfect المضارع); 未完了直接形*; 直接形; 未完了直接形・imperfect*	直説形		[動詞未完了形の語尾変化より]直説法*; 自然態; 自然状態	(未完了形)
接続法	接続形	接続法	動詞現在対格	接続法	未完了接続形(subjunctive mood المنصوب المضارع); 接続形*; [「接続法の用法」の箇所のみ]接続法; 未完了接続形・subjunctive	接続形		接続法[動詞未完了形の語尾変化より]	接続形[「接続形と要求形は、未完了形の一形態ですが…」]
要求法	短形*; 未完了形短形	要求法	動詞現在無母音格	要求法*; 短形	未完了短形(jussive mood المجزوم المضارع); 短形*; 未完了短形・jussive*	短形		要求法(希求法)[動詞未完了形の語尾変化より]	要求形[「接続形と要求形は、未完了形の一形態ですが…」]
アラブの文法家は完了形未完了形に加え 命令形(الامر): 直説法・要求法… 命令法:[項目として]命令形*	命令形	[見出し項目、命令の表現法を命令法と記述、過去形・非過去形・命令法と並べて、の三カ所]命令法:[動詞の形を示す場合。命令形の作り方etc]命令形	動詞命令	命令形	命令形: 否定でない命令(فعل الامر)	命令形		命令形	命令形
直説法・要求法… 強調法:[項目として]強調形*			動詞の強調形[現在動詞の語尾に <sup>هـ</sup> か <sup>ن</sup> を付加して動詞の強調形を作ることができる。…]						強調形[要求形の強調より]
強調形I形									
強調形II形									
強調語尾(-anna)			[ <sup>هـ</sup> か <sup>ن</sup> を付加して…]						
	未来形 …一般に سوف(saufa) または ساء(sa)をつけて未来形を表す						動詞未来形		
					「未来を表す接頭辞 <sup>سـ</sup> أو سوفを…」	未来詞 سوف, من	「動詞未完了形の前に سوف <sup>سـ</sup> か سوف <sup>سـ</sup> を付けて未来形を…」		未来詞
完了語幹			動詞の語幹: 過去語幹				語幹		
未完了語幹			現在語幹						
[完了形の]活用語尾	[完了形の]語尾変化	語尾:[注より]動詞過去形活用語尾	[接尾代名詞も「人称代名詞接続形」と呼んでいるがこの場合は完了形の人称語尾を意味する]人称代名詞接続形(動詞の主語として動詞に接続される人称代名詞); 動詞の人称代名詞主語を表す音	[完了形の]語尾変化		[完了形の]語尾	「完了形は語幹に接尾辞のみを…」	[完了形の]語尾	
[未完了形の]接頭素	[未完了変化の]接頭辞	動詞非過去形活用語尾[注より][実際は接頭辞の部分を指しているが…語尾と記されている]	人称文字[動詞語幹の前に置かれる文字で、1人称・複数、2人称、3人称が判別されるので「人称文字」と呼ぶ]	接頭辞		接頭辞	接頭辞	接頭辞	接頭辞

「アラビア語入門」池田	「現代アラビア語入門」黒柳・飯森	「基礎アラビア語」内記	「現在アラビア語入門講座」四戸	「アラビア語の入門」、「ステップアップアラビア語」本田	「基本アラビア語入門」奴田原	新版「アラビア語入門」佐々木	「初歩のアラビア語(06)アラブ・イスラーム文化への招待」鷺見	「イスラーム世界研究のためのアラビア語文法マニュアル」小杉	「アラビア語文法ハンドブック」新妻
[未完了形の]接尾素	[未完了変化の]接尾辞		語尾の音[動詞語幹の後に置かれる音で、単数/複数/双数、女性/男性が判別される]	接尾辞			接尾辞	接尾辞; 活用語尾	接尾辞
			連結母音[動詞語幹と人称文字を結ぶ短母音]						
特徴母音	[未完了形の]第二語根の母音	中間母音(第二子音に付く母音)	第2文字と第3文字との間の短母音	「第二語根の母音は…」	「第2語根の母音が…」	第2語根の上に付ける母音	特徴母音	第2語根の母音	「第2語根がファトハ、カスラ、ダンマ…」
	不規則動詞		不規則動詞[動詞語幹の形が2つ以上あるもの]	不規則動詞	不規則動詞	不規則動詞			不規則動詞
重子音動詞	ダブル動詞	重子音動詞[--- 卷末活用表より]	動詞語幹語尾強子音	ダブル動詞	2重(またはダブル)動詞; 2重(ダブル)動詞*	ダブル動詞			ダブル動詞
ハムザ動詞	ハムザ動詞				ハムザ動詞	ハムザ動詞			ハムザ動詞
第一根素ハムザ動詞	語頭ハムザ動詞		第1語根にハムザ文字を含む規則動詞		語頭ハムザ動詞	語頭ハムザ			第1語根ハムザ動詞
第二根素ハムザ動詞*; (または)中央根[ハムザ動詞]	語中ハムザ動詞		第2語根にハムザ文字を含む規則動詞		語中ハムザ動詞	語中ハムザ			第2語根ハムザ動詞
第三根素ハムザ動詞*; (または)語末根[ハムザ動詞]	語尾ハムザ動詞		第3語根にハムザ文字を含む規則動詞		語尾ハムザ動詞	語尾のハムザ			第3語根ハムザ動詞
弱動詞		弱子音動詞	不規則動詞[動詞語幹の形が2つ以上あるもの]					弱動詞	
第一根素弱動詞	第一語根 wāw 動詞	[非過去形で]、で始まる動詞; [命令形での説明で]第一弱動詞; [--- 卷末活用表より]頭弱動詞	動詞現在能動態語幹3文字語頭 و; 動詞語幹3文字(1形)語幹語頭 و	و(ワーウ)で始まる動詞[不規則動詞に含まれていない]	第1語根が「و」で始まる動詞	第1語根 و 動詞		第1語根弱動詞	同化動詞[第1語根が و かの]
第一根素 wāw 弱動詞									第1語根 و 動詞
第一根素 ya' 弱動詞									第1語根 ي 動詞
第二根素弱動詞	「くほみ」動詞(第二語根が wāw または yā の動詞); くほみ動詞(Hollow verbs)	[過去形部分での用語]間弱動詞; [命令形部分の説明では]第二弱動詞	動詞語幹語尾第2文字 و ي	くほみ動詞[不規則動詞の下位区分]	くほみ動詞	くほみ動詞(第2語根 و ي 動詞)		第2語根弱動詞	くほみ動詞
第二根素 wāw 弱動詞	第二語根 wāw(فعل)型の動詞; 第二語根 wāw(فعل)型の動詞	[非過去形部分での説明] وaWaوaを語根とする場合; وaWiوaを語根とする場合		[未完了形で]wをとるもの; [未完了形で]aをとるもの[の一部]	第2語根が「و」のくほみ動詞		a/ū パターン	第2語根 و 動詞	
第二根素 ya' 弱動詞	第二語根 yā(فعل)型の動詞; 第二語根 yā(فعل)型の動詞	[非過去形部分での説明] وaYaوaを語根とする場合; وaYiوaを語根とする場合		[未完了形で]iをとるもの; [未完了形で]aをとるもの[の一部]	第2語根が「ي」のくほみ動詞		a/i パターン	第2語根 ي 動詞	
第三根素弱動詞	「弱動詞」(第三語根が wāw または yā の動詞); 弱動詞(Weak verbs)	[命令形部分の説明で]第三弱動詞	動詞語幹語尾 و ي	弱動詞	弱動詞	第3語根 و ي 動詞		第3語根弱動詞	弱動詞
第三根素 wāw 弱動詞	第三語根が wāw の動詞			[完了で第三語根に]aの長母音がかかるもの	第3語根が「و」の弱動詞		a/ū パターン	第3語根 و 動詞	
第三根素 ya' 弱動詞	第三語根が ya' の動詞			[完了で第三語根に]iがかかるもの	第3語根が「ي」の動詞		a/i パターン、i/ā パターン	第3語根 ي 動詞	
				[完了で第三語根に]i(例外的に「アー」と発音する)をとるもの	第3語根がアリフ・マクスーラの動詞			第3語根 ي (アリフ・マクスーラ) 動詞	
	二重不規則動詞				2重不規則動詞	二重不規則動詞			2重不規則動詞; 二重不規則動詞



「アラビア語入門」池田 黒柳・飯森	「現代アラビア語入門」 黒柳・飯森	「基礎アラビア語」内記	「現在アラビア語入門講 座」四戸	「アラビア語の入門」, 「ステップアップアラビア 語」本田	「基本アラビア語入門」 奴田原	新版「アラビア語入門」 佐々木	「初歩のアラビア語(06) アラブ・イスラーム文化 への招待」鷺見	「イスラーム世界研究の ためのアラビア語文法マ ニュアル」小杉	「アラビア語文法ハンド ブック」新妻
[kāna の] 主語 ( اسم كان )								كان の主語	
[ 動詞 كان (kāna) の用法内 で説明]	كان の助動詞的用法		kāna は文も補語に取るこ とができるとしており、 この補語が動詞文の場合 が、他のテキストで助動 詞的用法としているもの]	助動詞的用法	「كان は他の動詞を伴っ て、助動詞的に使われま す」	be 動詞の助動詞的用法		[ かん文内で説明 ]	「كان を助動詞的に…」
kad とその姉妹語 ( اخوات كاد )	特殊な動詞		転機と継続の表現		can 及びその他の特殊な 動詞 [ كان , ليس , عسى , زال ]			その他の不完全動詞	助動詞的に用いられる他 の重要動詞
kad の主語 ( اسم كاد )									
kad の補語 ( خير كاد )									
間近にせまった行為を示す 動詞 ( افعال المقاربة )	特殊な動詞		寸前、希望 [ كان , عسى etc]				「---しそうになる、---す るところだった」[ كان ] 他 の動詞を伴い特定の意味 になる動詞より]		
行為をはじめる動詞 ( افعال الشروع ) または الإشياء ( افعال )	特殊な動詞		開始 [ بدأ , جعل , اخذ etc]				「---し始める」 [ بدأ ] 他 の動詞を伴 い特定の意味になる動詞 より]		開始の動詞 بدأ , شرع , جعل , أخذ
عاد			再開 [ عاد ]				「二度と---しない」[ عاد ] [ 他 の動詞を伴い特定の 意味になる動詞より ]		
			継続 [ ما زال etc]					その他の不完全動詞	
主観動詞 ( افعال القلوب )									
賞賛と非難を示す動詞 ( افعال المدح والذم ) [ نعم و بنس ]	[ 感嘆文の表現の説明中に ] نعم (ni'ma) よい, بنس (bi'sa) 悪い		非難と賞賛の表現、非難 と賞賛の動詞を用いる方 法、نعم、بنس で始まる非 難と称賛の文					特殊動詞 [ تعال , هات , هلم , نعم , بنس etc.]	نعم と بنس 賞賛と非難の動 詞
感嘆を示す動詞 ( افعال التعجب )	感嘆文の表現	ما + 派生第 IV 型過去動 詞 + 対格名詞 [ 感嘆文 の作り方より ]	感嘆の動詞		驚きや感嘆を表す افعال の形をとる文型	「主語が主格におかれ形 容詞の原形を ما افعال の型 にします」[ 対格のさま ざまな用法: 感嘆文より ]		{ 動詞派生形第 IV 型 の形をした } 感嘆の動詞	派生形第 4 形 ( 常に完了 形、3 人称男性単数 )
感嘆文	感嘆文の表現	感嘆文*: 数に関する感 嘆表現; [--- 文法用語一 覧より ] 感嘆	感嘆文; { その他の } 感 嘆の表現 [ ما افعال , --- افعال 以外の感嘆の表現 ]		驚きや感嘆を表す افعال の形をとる文型	感嘆文		感嘆文	感嘆文
数詞	数詞	数詞	数詞	数詞	数詞; [ 文法用語 ( 一 覧より ) ] 数詞 العدد	数詞	数字	数	数詞
基数	基数	基数詞	基数	基数	基数	基数		基数	
			助数詞 [ 数えられる対象 を指している。桁 ( ثلاثية المنة ) 部分も助数詞とし ている ]						
序数	序数	序数詞	序数; 序数詞	序数	序数	序数		序数	序数詞
分詞類似語									
分詞類似形容詞 ( الصفة المشبهة )									
辞詞		小辞 [--- 文法用語一覧より]					小辞	ハルフ ( 辞詞 )	
								助詞	
								語尾を接続法にする助詞 كي , ل , حتى , لن , أن	
								語尾を要求法にする助詞 إن , لا , ل , لنا , لم	
inna とその姉妹語; 「動 詞類似辞とも呼ばれている」	إن ('inna) と أن ('anna)		إن [ 読み方より ]	إن [ 「~と 思う」 の表現 より ]	إن とそのグループ	that 構文; that 構文導入 詞 إن		إن とその姉妹語	إن とその姉妹
	名詞文導入詞					強調文; 強調詞 إن			強調詞の إن; 名詞先行文 導入詞

「アラビア語入門」池田	「現代アラビア語入門」黒柳・飯森	「基礎アラビア語」内記	「現在アラビア語入門講座」四戸	「アラビア語の入門」、「ステップアップアラビア語」本田	「基本アラビア語入門」奴田原	新版「アラビア語入門」佐々木	「初歩のアラビア語(06) アラブ・イスラーム文化への招待」鷺見	「イスラーム世界研究のためのアラビア語文法マニュアル」小杉	「アラビア語文法ハンドブック」新妻
لام التعليل (理由を示す lām)									
لام الجحود (否定の lām)									
			強調の ِ		強調の ِ				
فَاء السببية (因果を示す fā')									
同時性の wāw									
呼びかけ(النداء)	呼び掛け				呼びかけ；呼称النداء [文法用語(一覧)より]	「呼びかけのيا…」			
呼辞									
呼びかけ対象語(المنادى = 呼びかけられるもの)									
絶対否定の لا			全否定(類否定)の لا	「何も…ない」(絶対否定)の表現		絶対的否定 لا		絶対的否定の لا	全面否定の否定詞 لا；全面否定の لا*
前置詞	前置詞	前置詞	前置詞	前置詞	前置詞；前置詞 حرف الجر [文法用語(一覧)より]	前置詞	前置詞	前置詞	前置詞
接頭前置詞	非分離前置詞		直後にくる語と接続表記する前置詞			1文字の前置詞	1文字からなる小辞		
独立形本来前置詞	独立前置詞		直後にくる語と接続表記しない前置詞 [名詞由来の前置詞も含む]			本来の前置詞			
名詞対格に由来する前置詞	名詞派生前置詞					名詞の対格から前置詞に転化したもの			名詞型前置詞
接続詞	接続詞	接続詞	接続詞		接続詞 العطف [文法用語(一覧)より]	接続詞	接続詞	接続詞	接続詞
接頭する接続詞									
独立して用いられる接続詞									
副詞	副詞	副詞 [--- 文法用語一覧より]	副詞	副詞	副詞 الظرف [文法用語(一覧)より]	副詞*：対格のさまざまな用法(副詞)	副詞的に用いられる場合	イスマの副詞的用法	副詞
本来から副詞であるもの									
接頭する副詞									
独立して用いられる副詞									
名詞から副詞に転用されたもの	名詞、形容詞からの転用								「アラビア語の副詞は امس ، هنا ، هناك ، فقط などその数はきわめて少なく、事実上対格となった名詞や形容詞が副詞の役割を果たしています」[時間を示す対格とその他対格の副詞的用法より]
間投詞	間投詞		間投詞					間投詞	間投詞
継続の ما			継続						継続の ما
関係代名詞(اسم الموصول)	関係代名詞	関係接続詞	関係代名詞；関係詞*；関係詞限定	関係代名詞	関係代名詞(اسم الموصول)	関係代名詞		関係代名詞	関係代名詞
関係従属節	「接続文中で…」			「関係文中で…」	関係節	関係節		従属節	関係節
	{ 疑問詞 من (man) 誰, ما (mā) なに, は } 先行詞を含む関係代名詞 { としても良く用いられ }		関係詞不定	先行詞を含んだ関係代名詞	先行詞を含む関係代名詞	先行詞を含む関係代名詞		「関係代名詞の ما、من は …」；「先行詞を含む形の …」	先行詞を含む関係代名詞 ما と من
否定の 'in									
			部分強調： لا سيما						
属格による限定(الإضافة 'al-'iḍāfatu)	「二つの名詞を結合する場合…」	二つの名詞の連続；名詞連続*；[--- 注より]「メーシ・アルメーシ (イ) として覚える…」	複合名詞；[複合形容詞も含む]複合語*	of の表現	複合名詞 イダーファ (إضافة)；複合名詞(イダーファ)	複合名詞*；イダーファ	イダーファ	属格連結*；イダーファ	属格関係
構成位相 {に置かれる…}	はじめの名詞；前の名詞	被連続名詞 [--- 文法用語一覧より]	付加加語*；被修飾語	前の名詞	前の名詞	A の B [ の A]	前の名詞	前の名詞	先行する語
「名詞属格を後続…」	後の名詞	あとの名詞；後続名詞 [--- 文法用語一覧より]	付加加語*；修飾語	後ろの名詞	後ろの名詞	A の B [ の B]	後ろの名詞	後ろの名詞	後ろにくる語；属格語

「アラビア語入門」池田	「現代アラビア語入門」黒柳・飯森	「基礎アラビア語」内記	「現在アラビア語入門講座」四戸	「アラビア語の入門」、「ステップアップアラビア語」本田	「基本アラビア語入門」奴田原	新版「アラビア語入門」佐々木	「初歩のアラビア語(06)アラブ・イスラーム文化への招待」鷲見	「イスラーム世界研究のためのアラビア語文法マニュアル」小杉	「アラビア語文法ハンドブック」新妻
合成形容詞	複合形容詞		複合形容詞*:[複合名詞も含む]複合語	複合形容詞	複合形容詞	複合形容詞		合成形容詞(複合形容詞)	複合形容詞
			関連形容詞[被修飾語に関連のある語の性質を述べながら、形の上だけ被修飾語を修飾]						
前置詞の属格支配	「名詞の前に前置詞がつくと…所有格」	「前置詞に支配される名詞は属格…」	「前置詞を修飾する付加語の格は属格…」[「前置詞句をつくる語の格」より]	「通常、前置詞のあとにくる名詞は、文法上属格に…」			「前置詞の後ろにくる単語が属格…」	「前置詞に支配された時…」	「名詞や形容詞が前置詞の後に来た場合…」[属格より]
تاميز (التمييز) 'at-tamyiz, 説明の対格); tamyiz : التمييز ('at-tamyiz)		كثرに伴われる抽象名詞(不定対格);[-- 文法用語一覧より]対格補語	「程度を表す語「大きい」「小さい」…このような場合、助数詞を用いて、「何が」を表現する。格は対格である…」	比較級の後ろに名詞(対格)を伴う表現		特別な比較級[対格のさまざまな用法より]		形容詞の比較・最上級に関する情報を付加する表現[対格の特別な用法]	「～においてより～だ」の形をとるものです。そして「～において」を示すには非限定名詞の対格が用いられます」[比較級の他の構文より]
同格名詞			言い換え						置き換え用法(同格用法)
警告(التحذير)や激励(الاعزاء)を示す表現									
									祈願
									誓約の و, ب, ت
特定(الاختصاص)を示す表現									
行為の原因を示す動名詞(مفعول لهとか مفعول لاجله)と呼ばれる)			理由:[動詞文:理由より]名詞を対格にして理由を表す			行為の原因、理由を示す動名詞[対格のさまざまな用法より]			動名詞の副詞的用法:目的と理由を示す動名詞
行為がなされる時や場所を示す名詞対格(مفعول فيとか ظرفと呼ばれる)			「動詞文では時/場所を表す場合は時/場所を表す語を対格にして用いる」			場所、時間の副詞[対格のさまざまな用法より]		時・場所・程度に関する情報を付加する表現[対格の特別な用法]	時間を示す対格とその他対格の副詞的用法
接続詞 وが مع の意味に用いられる表現における継続名詞(مفعول معهと呼ばれる)			接続名詞 وが مع の意味で用いられる						
hāl : الحال 'al-hāl			「自動詞を修飾する語の格は対格…」;様態表現:[「動詞が示す行為がどのような状態で行われたかを示す表現で、動詞を修飾する文である。」]様態文:様態句:様態名詞			状態を示す対格[対格のさまざまな用法より]		状態に関する情報を付加する表現[対格の特別な用法]	[能動分詞と状況説明より]状況説明:[ و ]と状況構文より]状況文
الحال (状態を示す wāw)	状態を表す و [接続詞の説明中に]	状況の و [-- 文法用語一覧より]	様態文(動詞が示す行為がどのような状態…);「接続詞 و を用いて、動詞の状態を補足することができる。」;[ و ]の特別な用法]状況接続詞						و と状況構文
رب 同意の و									
例外表示文			例外表現			例外 لا			除外詞 لا とその仲間
例外語			例外の対象			例外語			除外の対象
非例外語									
否定辞: 否定詞	否定詞	否定詞	否定詞	否定詞	否定詞:[文法用語(一覧)より]否定詞 النفي	否定詞	否定詞		否定詞
	否定副詞[副詞の説明中に一カ所のみ]								
否定文		否定					否定文	否定文	
否定命令			禁止の命令	禁止の文					



「アラビア語入門」池田	「現代アラビア語入門」黒柳・飯森	「基礎アラビア語」内記	「現在アラビア語入門講座」四戸	「アラビア語の入門」、「ステップアップアラビア語」本田	「基本アラビア語入門」奴田原	新版「アラビア語入門」佐々木	「初歩のアラビア語(06) アラブ・イスラーム文化への招待」鷺見	「イスラーム世界研究のためのアラビア語文法マニュアル」小杉	「アラビア語文法ハンドブック」新妻
疑問詞*；疑問(辞)詞	疑問詞	疑問詞	疑問詞	疑問詞	疑問符(أ، هل)；疑問詞；[文法用語(一覧)より] 疑問詞 اسم الاستفهام	疑問詞	疑問詞	疑問詞	疑問詞
疑問代名詞 [疑問詞の説明中に一カ所のみ]					疑問代名詞				
疑問副詞 [疑問詞の説明中に一カ所のみ]	疑問副詞 [副詞の説明中に一カ所のみ]				疑問副詞				
疑問文		疑問文 [-- 文法用語一覧より]	疑問文		疑問文	疑問文	疑問文	疑問文	
「إ」の用法 i) 動詞文および名詞文の肯定・否定のいずれにも用いられ…」									
「هل」の用法 i) 動詞文および名詞文の肯定的疑問を示すのに…」									
「هل」の用法 i) …ただし、هل…! という反語的疑問文…」									
「إ」が用いられている疑問文には、…質問事項に対する無関心・否認・非難・確認・脅迫・驚嘆などを示すものがある。」			否定疑問文						
「هل…! أم… هل…! のような結びつきで、”Aか、それともBか”のような疑問表示に…」			選択疑問文						
			付加疑問文	付加疑問文					
条件詞	条件文導入詞	条件文を導く接続詞	条件詞					条件詞	条件詞
条件文	条件文	仮定表現	条件文			条件文		条件文	条件法
条件節	条件節	条件文	条件節	「إن(もし…ならば), من(…する人は誰でも)…などに導かれた条件節(あるいは応答節)…」		条件節		条件節	条件節
主節	応答節	帰結文	応答節	「إن(もし…ならば), من(…する人は誰でも)…などに導かれた条件節(あるいは応答節)…」		応答節		帰結節	応答節
願望文	願望文		誓文；誓約文		願望などを表す慣用表現とその短縮した形	願望文			
		«لو» 「たとえ～であっても」							
[66 条件文の 2) 条件節および主節の動詞を要求法とせず完了形とする条件詞…の中に] «ف… أم…» について言えば、それは…だ	[接続詞の説明中に] «ف… أم…» («ammā ~ fa») について言えば					«ف… أم…» の文			«ف… أم…» 構文
									ذوの用法
古典アラビア語；現代アラビア語 [序論より]	文語 (正則アラビア語)			書き言葉 (フスハー)	フスハー (fushā)；標準アラビア語；正則アラビア語	書きことばとしてのアラビア語 (フスハー)	書きことばフスハー		
現代アラビア語諸方言 [序論より]	口語 (通俗語)			口語 (アーンミーヤ)	口語；方言	話し言葉としてのアラビア語 (アーンミーヤ)	話しことばアーンミーヤ		